

I K U S E I

わくせいの

2013 51



公益社団法人 **競走馬育成協会**

CONTENTS

■巻頭言

○馬の驍と美しく見せる技術

小玉 剛資 (日本中央競馬会 馬事部生産育成対策室 室長) ①

■特 集

○1. 育成技術講習会講演録

海外で競馬を学ぶ ②

— 海外経験者が「世界の馬づくり」を語る —

演者：富成 雅尚 氏 (JRA 日高育成牧場)

中内田 充正 氏 (栗東トレーニングセンター)

本木 剛介 氏 (元バリードイル・レーシング)

田中 敬太 氏 (ビットコントロール) 美浦のみ

大館 敦志 氏 (UPHILL) 栗東のみ

進行：富田 篤志 氏 (JRA 馬事部生産育成対策室)

○2. 牧場就業者参入促進事業

「競走馬の牧場で働こう BOKUJOB フェア 2013」 ②③

■行 事

○平成25年度 定時総会開催 ③①

○平成25年度 育成等に関する懇談会 ③①

■事 業

○平成25年度 育成技術講習会 ③③

○平成24年度 育成技術表彰事業 ③⑤

○平成25年度 海外派遣研修事業 ③⑥

○平成25年度 修学奨励金交付事業 ③⑨

○平成25年度 生産育成牧場就業者参入促進事業 ④①

■お知らせ

○地方競馬の馬主になりたい ④①

○競走馬育成協会人事



題字 前会長 小沢一郎
表紙写真 内藤律子

馬の躰と 美しく見せる技術



日本中央競馬会 馬事部生産育成対策室 室長
小玉 剛資

JRA では第 80 回日本ダービー当日に本邦初の試みとなる「ベストターンアウト賞 (Best Turned Out Award: 以下 BTO 賞)」を実施しました。「BTO 賞」は海外の主要競走などで行われており、『最も美しく手入れされ、馬がよく躰られ、かつ人馬の一体感を感じさせるパレードができていない馬を担当する厩務員』の努力を称え、表彰するもので、これまで海外遠征した複数の日本人厩務員も受賞しています。初めての実施ということもあり、実施にあたっては厩舎関係者向けに両トレーニングセンターで説明会を実施しました。説明会にはダービーに出馬登録している厩舎を中心に多くの厩舎スタッフに参加され、同賞への関心の高さを感じました。

さて、その実施にあたっては、審査のポイント・着眼点を明確にするため、馬事部生産育成対策室を事務局に、元 JRA 騎手岡部幸雄氏をはじめ海外駐在員など様々な方々にお話を聞き、審査のガイドラインを作成しました。もともと、審査は主観的な要素を多く含むものですが、『馬がよく躰られ、美しく手入れされ、かつ人馬の一体感を感じさせるパレードができていないか』を骨子に、構成を大きく①基本的な馬の取扱い・躰、②美観、③人と馬との絆・総合判断の 3 項目に整理しました。

ダービー当日は、各厩舎スタッフの出走馬に対する熱意や愛情を感じさせる見事なパレード披露でしたが、最終的には審査委員長をしていただいた銅版画家の山本容子さんの「人馬が颯爽と、そして会話するように、しかもとてもナチュラルな姿が印象的」という一言で受賞者が決定しました。審査結果は、本馬場入場後のターフビジョンと場内放送で発表しましたが、満員のスタンドからは大きな拍手が起り、お客様も、レースの勝敗とは切り離れた新しい視点で、サラブレッドの美しさのみならず、厩舎スタッフの馬に対する愛情、手入れや取扱いの技術、レースに挑む関係者の熱意や人馬の信頼関係などを感じ取っていただけたのではないかと思います。

前振りが長くなってしまいましたが、馬をより美しく見せる技術とは、日頃からその馬と接しているスタッフと馬との信

頼関係を表すバロメーターの一つではないでしょうか。生産育成牧場においても、これらの技術は競走馬として馬を育成していくうえで重要な基本技術だと思います。たてがみや尾、距毛にいたるまでしっかりとトリミングがなされ、ブラシ等で十分に皮膚がマッサージされ、見た目に皮膚のうすい艶のある馬は市場等でも注目される存在です。しかし、ここで言う美しく見せる技術とは、毛艶などの見た目の美しさばかりを指しているではありません。先ほど BTO 賞のところでも触れましたが、人馬の深い絆のもとしっかりとした「躰」がなされ、人の指示に従順に反応し、快活に動作する馬を育てる技術です。このような馬の姿は誰から見てもすばらしく見えるものです。もちろん、それぞれの馬の気性や個性に合わせた取扱いが必要なことは言うまでもありません。また、チフニーやチェーンシャンクなどの馬具を適切に使用することも重要です。

日本の軽種馬の生産育成技術はここ 10～20 年の間に飛躍的に向上しています。当歳・1 歳・2 歳市場で上場される馬の質は明らかに欧米先進国と肩を並べるレベルになり、市場への海外バイヤーの参加も珍しい光景ではなくなりました。とは言え、一般的な生産育成牧場では、限られたスタッフで多頭数の生産・飼養・馴致・調教等をこなさなければならない状況にあり、一頭一頭の馬に十分時間をかけて手をかけることは困難かもしれません。しかし、生産頭数が減少トレンドにあるなか、中央競馬の馬主登録数は新規馬主数の増加によりトータルでも増加に転じています。このような情勢の今だからこそ、基本に立ち返り、生産育成技術の向上と特色ある馬づくりに邁進するときだと思います。

JRA としても「強い馬づくり」のための①調査研究・技術開発とその普及、啓発および指導、②生産育成に係る人材の確保・養成に関する支援、③育成調教に係る競争力の向上に対する支援などを通じて、積極的に皆様方を支援してまいりたいと考えています。当室では皆様方からの積極的な提案をお待ちしています。

海外で競馬を学ぶ

— 海外経験者が「世界の馬づくり」を語る —

美浦トレセン 10月30日(水)

栗東トレセン 11月6日(水)

演者：富成 雅尚 氏 (JRA 日高育成牧場)

中内田 充正 氏 (栗東トレーニングセンター)

本木 剛介 氏 (元バリードイル・レーシング)

田中 敬太 氏 (ビットコントロール) …… 美浦のみ

大館 敦志 氏 (UPHILL) …… 栗東のみ

進行：富田 篤志 氏 (JRA 馬事部生産育成対策室)

注) この講演録は美浦および栗東トレセンで開催された講習会を合成したもので、田中氏および大館氏は、それぞれ美浦および栗東のみ参加しています。

【はじめに】(富成)

講演に先立ちまして、本日の講習会の企画者、発案者の1人として、その趣旨と流れについてお話しさせていただきます。本日の講習会の趣旨は、多くの方に海外の「馬づくり」をお伝えすることです。そして、講演は2つのパートに分けておこないます。

1つ目のパートはプレゼンテーションとして、私が2年間にわたってアイルランドの厩舎で経験してきたことを紹介します。そして2つ目のパートはパネルディスカッションで、3名の海外経験者の話を様々なテーマに基いて話をすすめていきたいと思います。パネリストのみなさんは、いずれも海外に長期間にわたって滞在し、厩舎で仕事をしてきた方たちです。滞在先も、アメリカ、イギリス、アイルランド、オーストラリアなど世界各国で、バラエティに富んでいます。

このような海外の話をすすめていくと、こう考える方もいらっしゃるのではないのでしょうか？

「海外の馬づくりは日本より上なのか？」

「日本馬は、国内外の競走で海外の馬と互角かそれ以上に戦ってきているのでは？」

「これ以上、海外から学ぶべきものはあるのか？」

しかし、決してそういうことを言いたいのではありません。どちらが上か下かということではなくて、海外の競馬あるいは馬に関わる文化や産業にはそれぞれ背景の違いがあります。歴史、気候、馬場、競馬のシステム、血統的背景などであり、このような異なる背景をもった各国の「馬づくり」を伝えたいのです。背景の異なる各国の馬づくりを知ることで、

「相違点」「共通点」を認識することができます。相違点、すなわち「違い」を認識することにより、馬づくりにおける引き出しを増やすことができますし、共通点を認識することにより、それらが普遍的であり、どこでも共通する重要事項として認識することができます。

以上のように、本日の講習会においては、多くの方に海外の「馬づくり」をお伝えして海外の事例を参考にしていただきたいと思っておりますが、育成牧場の若い方には、機会があればぜひ実際に体験していただきたいと思っております。これらを通じて、海外と日本の馬づくりの「相違点」「共通点」を認識していただければ幸いです。

【第1部プレゼンテーション】(富成)

私は2011年～本年までの2年間、アイルランドで馬産を中心に研修してきました。

こちらにおもな研修先の一覧を示します。

おもな研修先一覧 (2011年1月～2013年1月)

生産牧場	競走馬厩舎
アイリッシュ・ナショナル・スタッド	マチュー・ボルシエ厩舎
ティナキル・ハウス・スタッド	児玉敬厩舎
キルダンガン・スタッド	ケビン・ブレンダーガスト厩舎
クールモア・スタッド	マイケル・ハルフォード厩舎
キルダラ・スタッド	バリードイル・レーシングステーブル
馬診療施設	トレイシー・コリンズ厩舎
トロイタウン・エクワイン・ホスピタル	
フェザード・エクワイン・ホスピタル	
ロスデール・エクワイン・ホスピタル	

生産牧場としては、アイルランドの大規模牧場である、キルダンガン・スタッドおよびクールモアスタッド、診療施設としては、アイルランドを代表する診療施設であるトロイタウンエクワインホスピタルなどにおいて比較的長期間にわたる研修を実施し、馬産の基礎を学ぶことができました。一方、繁殖シーズン以外は競走馬厩舎を中心に研修を実施しました。世界有数の調教師であるエイダン・オブライエンが指揮をとるバリードイル・レーシング・ステーブル、カラのトップトレーナー、ケビン・ブレンダーガストやマイケル・ハルフォード厩舎などで実践的な研修を実施しました。このような研修をとおして私が学ぶことができた、3つのこと、調教方法・育成方法・馬の取り扱いについて話したいと思います。

始めに調教方法ですが、調教方法については「集団調教」、「日々のルーチンの調教」、「ワーク（追い切り）」の3つのパートで説明します。

まず集団調教についてですが、アイルランドの中規模～大規模厩舎においては、集団調教がルーチンの調教の基本になっています。

エイダン・オブライエン率いるバリードイルのウォーミングアップです。約40頭で極力間隔を詰めて常歩を行い、この後、速歩を実施します。



バリードイル調教場 ウォーミングアップ

同じくバリードイルの明け2歳のウォーミングアップです。約20メートル四方の囲いの中、密集しながら速歩を実施しています。



バリードイル調教場 ウォーミングアップ 明け2歳馬

カラのトップトレーナー、マイケル・ハルフォードの厩舎です。中規模な厩舎で、12月の1歳馬のキャンターで、約10頭程度で3、4馬身の間隔の縦列調教をしています。



マイケル・ハルフォード厩舎 1歳馬

こちらもカラ調教場のケビン・ブレンダーガスト厩舎です。同じく中規模厩舎です。1ロット10～15頭程度で、アイルランドでは、規模に応じて頭数は異なりますが、集団調教が基本です。



ケビン・ブレンダーガスト厩舎

集団調教の利点としては、馬自身が安心して調教することができます。また、一方で、極力馬群をつめて調教することで、欧州競馬の道中で見られる、「馬込み」に慣れることができ、精神力が鍛えられます。更に、競走能力の向上にも寄与します。前の馬にペースを合わせなくてはならないため、折り合いが必要になります。これがレースに行つての折り合いに繋がります。また一方で、前に馬がいるため前進氣勢が促進されます。前進氣勢がある馬を、折り合いをつけて、スピードを抑えることにより、体全体を使った走行フォームの形成にも寄与します。

次にベースとなるルーチンの調教ですが、通常ハロン18から20秒のキャンター（ステディ・キャンター）で、隊列は縦列、シングル・ファイルで実施することが一般的です。もちろん、コース、距離、スピードは厩舎やシーズンの時期によって異なります。

バリードイルでは、3%の勾配がある900mのウツ

ドチップコースを、1, 2本走行します。



バリードイル調教場 900m 坂路ウッドチップ 1-2本

ケビン・ブレンダーガスト厩舎は、自厩舎内にある1200mの周回のファイバーサンドのコースを1～3周行なっています。



ケビン・ブレンダーガスト厩舎の調教コース
1200m 周回ファイバーサンド 1-3周

使用している馬場も厩舎によって、当然異なりますが、どちらかというルーチンで使用している馬場素材は、安定性が高い傾向にありました。

バリードイルでは、チップが細かく、締まった馬場で、ロット毎に転圧作業をしています。



チップが細かく、締まった馬場



ロットごとに転圧

最後にワーク（追い切り）ですが、アイルランドにおいては、芝コースでのワークを実施する厩舎が少なくありません。概ね週2回2～3頭以上で並走の形で（厩舎・時期によってはリードホースを使用して）行なわれます。



カラ調教場 坂路ウッドチップコースでのワーク

実戦を想定して、長い距離で行うこともあります。アイルランドの芝コースは、自然の地形をそのまま利用しており、アップダウンが大きく、更に芝が重いため、負荷がかかるコースになっています。



自然の地形を生かした調教コース

また、シーズン前や初出走前などは、競馬場でのスクーリングをかねた実践的なワークが頻繁に実施されています。

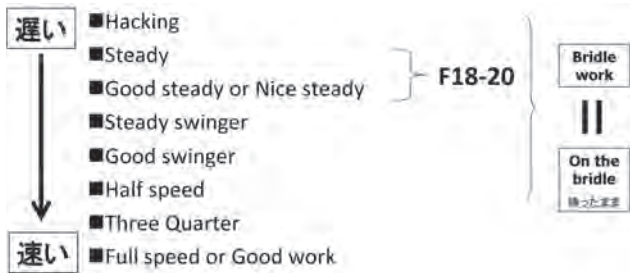
アイルランドで実施されているワークのうち、ペースワークと呼ばれるものがあり、比較的頻繁に実施されています。これは、もったまま (On the bridle)、スタートから徐々にスピードを上げ、最後まで余力を残し、馬を疲労させ過ぎない調教です。動かない馬の場合には、馬を押す (push)、脚ではさむ (squeeze) ことはしますが、ムチを入れることは殆どないというもので、最後まで手綱を押さえつづけることもよくあります。



競馬場でのスクーリングをかねたワーク

アイルランドにおいては、ワーク時にタイムの計測はしていません。

調教師は、騎乗者へのスピードの指示は、言葉で伝えます。ここにスピードを表す単語を示します。



上から順番にスピードが上がっていき、ハーフスピードまでを概ねブライドル・ワークと呼んで持ったままのスピードとなります。このことから、馬によっても、騎乗者によっても、スピードは若干異なります。

ワークの際には、殆どの調教師はゴールもしくは上がりで、馬の状態を把握します。



調教師はゴール・上がりで馬の状態を見る

アイルランドの広大な調教場では、ゴール地点からスタート地点を見ることはできません。このため、事前に指示はするものの、道中のペースは騎乗者に任せる傾向にあり、調教師は馬の状態・感触を騎乗者に確認します。



道中のペースは騎乗者に任せる

バリードイルでは、この写真のようにエイダン・オブライエン調教師がジープで追走し、無線でスピードを指示しています。



ジープで追走し、無線で指示 (バリードイル)

- アイルランドの調教の全体的な特徴は、
- シーズン (3月から11月) 開始前から徐々に仕上げていく
 - 無理せず、競馬を使いながら仕上げていく
 - 走る気持ちが出てこない馬に対しては走る気持ち

が出るまで待つ
といったところです。

続きまして育成方法ですが、育成方法については「馴致前の準備（デンタルケア）」、「ランジング」、「ドライビング」、「騎乗」の4つのパートで説明します。

騎乗馴致、ブレーキングの方法は、日本で一般的に普及されている方法と同様です。ランジング、ドライビング、そして騎乗という流れになります。そして、ブレーキングの実施前に重要なことは、口腔内の疼痛に注意を払うこと、すなわちデンタルケアです。

写真はランジングの際に、頭を上げる仕草「ヘッドアップ」です。この原因は口腔内の痛みです。



ランジングの回転時に頭部を挙上「ヘッド・アップ」

ブレーキング前のハミへの反応の確認方法です。これは、アイルランド最大手のピンフッカーであるバンシャハウスステーブルスのコン・マネー氏によるブレーキングの動画です。彼は年間50頭以上のブレーキングをほぼ1人で手がけています。彼は、ブレーキング開始前に、このようにハミの反応を確認します。ハミに対して、ヘッドアップや突進などの反抗的な行動をとることが分かります。



ハミへの反応の確認

通常、このような仕草を見せる場合には、狼歯や斜歯（歯がとがっている）、口腔内のキズなどが確認されます。



口腔内のキズ

このため、事前のデンタルケアは極めて重要になります。騎乗馴致の前にデンティストに整歯処置や狼歯を抜歯してもらおうようにしていました。



事前の整歯処置・狼歯抜去

デンタルケアをした場合であってもブレーキング実施時の若馬においては、口腔内に痛みが生じることが多いことから、厩舎によっては、ブレーキングをして一度騎乗可能な状態にしておいて、放牧休養させるところもあります。



馴致後の一定期間、放牧させる厩舎もある

ランジングにおいては、日本でも行われているように、最も重要なポイントは「ボイス・コミュニケーション」です。ここでしっかりと、人の声、立ち位置による指示、合図への反応を構築することが、重要視されています。



ランジグ=ヴォイス・コミュニケーション

ランジグでコミュニケーションを構築した後は、ドライビングに移行します。ここは時間をかけて念入りに実施します。先ほどのコマナー氏も、左右の回転を頻繁に実施し、トータルで最低でも1週間以上はドライビングに時間をさきます。



ドライビング：左右回転（バンシャハウスステーブルス）

こちらはケビン・ブレンダーガスト厩舎におけるドライビングです。様々な場所でランジグ、ドライビングを実施し、環境に慣れさせるとともに、左右のハミ受けを作ります。厩舎と柱の間の狭いところを通すなどして、様々な環境に慣れさせていました。しっかりとドライビングをした後で騎乗に入ります。



ドライビング：左右回転（ケビン・ブレンダーガスト）

次に騎乗です。

最初はこのように横乗りをしながら慣れさせる方法が一般的です。横乗りから初めて、ラウンドペンの中のランジグレーンで騎乗を開始します。



その後で多く取り入れられていたのは、放牧地での8の字走行です。これは騎乗馴致時の放牧地での8の字走行の映像です。回転走行により、左右の口向きを形成するとともに、負荷がかかり、凹凸のある不整地での走行で、馬が騎乗者を乗せた場合のバランスに慣れさせます。このような場所での走行は、馬も転びたくないなので、馬が走ることに集中でき、これを続けることで人を乗せたバランスにも直ぐ慣れる良い調教になるとのことでした。



放牧地での「8の字走行」（ケビン・ブレンダーガスト）



通常、競走馬厩舎では、若手の騎手が在籍していますので、彼らを最初に騎乗させることが多いようです。体重が軽く、子供のころから騎乗しているため、バランスも良いのですが、若馬の突発的な動きに慣れることは、競馬での騎乗の際にも有効になるということで、多くの調教師は、積極的に若手騎手に騎乗させていました。

先ほどのコマナー氏は、ちょっと変わった方法を採用していましたので、ご紹介します。ここでは重しを利用した馴致を行っていました。

まず始めにカーペットのような素材で作成した20kgほどの重しを背中の上に載せます。これにより、背中へある程度の重さがのることに慣れさせます。また、騎乗者の脚が腹部にあたることに慣れることにも役立ちます。



重しを利用した馴致（バンシャハウス）

次にセーフティライダーと呼ばれる騎乗人形を利用します。



Safety Rider (Ardall 社製)

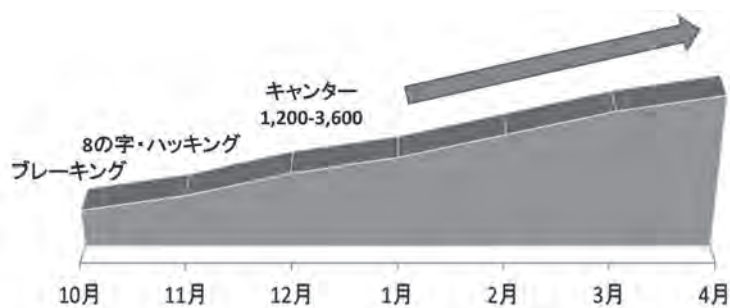
これは、中身がウレタンで作られた人形で、背中に装着できるようになっています。上でゆらゆらするので、馬は勢いよく走ったり、中には人が乗ったらひとたまりもなく振り落とされるくらい暴れる馬もありますが、殆どの馬は1日から遅くとも2日もすると慣れて落ち着いてきます。



このような方法は、騎乗者が豊富にいる厩舎では必要ないかもしれませんが、少ないスタッフで多頭数のブレーキングを実施するような厩舎では、重宝されているようです。これを導入してから、馴致時の落馬事故が激減したそうです。

これは、アイルランドにおける若馬の体力養成を示した模式図です。多くの厩舎において、ブレーキング後はこのように、段階的に基礎体力を養成していき、3月から始まる平地シーズンに備えています。

厩舎によっては、調教師が晩成型と判断した場合には、一定期間の放牧休養をさせることもあります。



最後に3つ目ですが馬の取り扱いについてです。

アイルランドにおいては、子供のころからポニー競技やアマチュア競馬があるなど、馬が常に身近な存在にあります。そこでは小さいころから、リーダーシップ、オンとオフの明確化、馬を見せる姿勢などの馬の取扱い技術や馬に対する考え方が培われています。



アマチュア競馬

まず始めは、馬に対するリーダーシップです。

アイルランドの調教場には囲いがなく、ラチがないコースも多くあります。また、この写真のようにコースに多くの羊がいることも珍しくありません。このような場所での騎乗においては、常に人間がリーダーシップを取り馬を誘導しなければいけません。



この写真は、私が最初に研修した厩舎の調教師が、自らクリッピングをしているものです。写真を見てもお分かりのとおり、頭絡にリードロープを装着しただけです。鎮静もしていません。このような状態で馬房の隅に立たせて、静止させています。お腹やトモなど、馬が嫌がる部分を刈っていても、馬は大人しくしています。アイルランドには、このように、

馬に対して強いリーダーシップを発揮して、人間の指示に従わせるホースマンが多くいます。

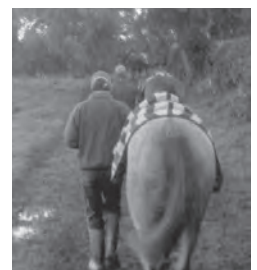


つづいては、オンとオフの明確化です。アイルランドの調教においては、馬に対してオンとオフを明確にさせて、馬の精神面の安定をはかっています。ケビン・プレnderガスト調教師は、この点を重要視していました。

ワークの前のウォーミングアップにおいては、下馬してゆっくりとした常歩を実施します。私がウォーミングアップでしっかり歩かせようとした際に、逆に注意を受けたほどです。そして、ワーク実施後も、同様に下馬し、腹帯を緩めて、クーリングダウンを実施します。



ワーク前



ワーク後

また、クーリングダウンを終えたあとは、毎日このように砂浴をさせて、午後にはグラスピッキングをさせていました。このように、騎乗時以外は、馬に対して精神的なオフを提供することによって、走ることを嫌がらない努力をしていました。



午後のグラスピッキング



調教後の砂浴び

つづいて、馬を見せる姿勢です。

さきほどもご紹介したように、アイルランドでは子供のポニー競技が盛んに行われています。

この写真はアイルランドの大きな乗馬大会のものです。ポニー競技は、障害飛越やポニー競馬のみならず、このような馬の躰と見た目を競う競技も行われます。このような競技を通して、小さいころから馬を見せる姿勢が培われているのではないかと思います。



ポニー競技

これはロイヤルアスコットの厩舎地区でのフランケルの出走前の写真ですが、丁寧にパレーディングされたり蹄油を塗られたりしています。アイルランドにおいては、馬社会全体に、このような「馬をみせる」が浸透しているように感じます。馬を綺麗に見せるのはホースマンの仕事ではあるのですが、それだけではなく、自分たちが調教してきた馬、生産・育成してきた馬を見せることがホースマンにとって「馬づくりの醍醐味の1つ」として、認識されているのではないのでしょうか。



ロイヤルアスコット開催クイーンアンS出走前のフランケル

まとめです。

海外では数多くのことを学ぶことができると思います。

- 日本との育成調教方法の違い
 - 長い歴史で培われてきた馬の取扱い
 - 世界的な広い視野
 - 様々な環境への順応性
- などです。

是非、多くの方が海外競馬に興味を持っていただいて、海外の馬づくりを見てきて、日本の競馬を盛り上げていただけることを期待します。

最後になりましたが、本研修を行うにあたり、多大なるご協力いただきましたアイルランドの児玉敬調教師に深く感謝申し上げます。

質疑応答（栗東）

質問：いろいろな国で、人の気質の違いや国の特徴によって仕事へ与える影響の違いについて、お考えや体験等を伺いたいのですが。

回答：後ほどパネルディスカッションでも取り上げられますが、日本人が1番仕事に対して真面目でキチンと仕事をするのでどの国に行っても重宝がられると思います。アイルランド人はラフというか大らかな人が多く、むしろそちらの方が馬はリラックスできるのかもしれない。しきりに声をかける気質の人達なのです。アイルランドでは馬だけでなく牛や羊や犬とかも周りに沢山いて、動物とコミュニケーションをとることが普通にできる人達です。このことについてはまた後ほど他の人からもいろいろな意見が出ると思います。

【第2部パネルディスカッション】

≪パネリストの紹介≫

進行: まずパネリストの紹介をします。富成さんは先ほどの講演をもってご紹介に代えさせていただきます。まず田中敬太さんですが、田中さんは海外遠征コーディネーターとしてご活躍されており、ご存知のとおり先の凱旋門賞でキズナ号に帯同してマネジメントされました。田中さん、海外へ行くきっかけは何だったのでしょうか。



田中 敬太氏

(株) ビットコントロール代表

- 2001年** 高校卒業後にオーストラリア・シドニーへ留学。
- 2002年** アローフィールドスタッド、クールモア・オーストラリアなどで生産、セリ馴致などに携わる。
- 現在** 先日の凱旋門賞のキズナ号を含め、多くの日本馬の海外遠征（米、英、仏、豪、香港、ドバイなど）に携わる。

田中: 田中と言います。よろしくお願いします。まず始めは高校時代に競馬ファンになり、競馬を仕事にしたいと思うようになりました。いきなり牧場で働く自信もなかったのですがまず勉強しようと思いましたが、自分の調べた範囲では日本国内で馬のことを勉強できる環境がなく、オーストラリアに競馬の専門学校があるということを知ったのでそこへ行くことにしました。まず語学学校で英語を学んでから競馬の学校へ行きました。

進行: その後色々な牧場で生産とかの仕事はされていますが、どのようなことをされましたか。

田中: 大手の生産牧場でお産や種付け、1歳セールに向けた馴致などに携わっていました。生産牧場の仕事全般をしていたと思います。

進行: 現在は遠征馬に帯同して仕事をされていますが、どれくらいの国に行かれましたか。

田中: 7年間この仕事をしてしていますが、日本の馬が遠征するのは大体7~8ヶ国になります。競走で言うと41のレースに帯同しました。

進行: これは遠征馬に帯同中の写真ですが、左上の写真はどういった状況の時ですか。

田中: これはウオッカがドバイの厩舎から競馬場で馬運車で運ばれている時ですが、レース当日は馬に付き切りになるので、馬運車にも一緒に乗ります。右の写真は先日の凱旋門賞のパドックですが、トラブルがないよう馬についているのが競馬の日の仕事です。左下はアイルランドの生産牧場で、今お世話になっているオーナーの馬を預かってもらっている牧場で、マネージャーと種付けのことで打合せをしているところです。

進行: 色々な国を見られてきたということなので、この後でまた話を聞かせてください。続きまして中内田充正さんです。1996年アイルランドの高校を卒業しイギリスのウエストオックスフォード大学の馬学科に留学、その在学中にリチャード・ハノン厩舎、サー・マーク・プレスコット厩舎、フランスのクリケット・ヘッド厩舎等で研修をされ、2000年にアメリカに渡り就職先として、ロバート・フランケル厩舎、ロバート・スキャンロン厩舎に所属されました。2006年に帰国されて競馬学校を経て栗東の橋田満厩舎に所属され、昨年調教師免許を取得、現在は技術調教師として藤原英昭厩舎で研修されているところです。中内田さんが海外の競馬に興味を持たれたキッカケは何でしたか。

中内田 充正 氏

栗東トレーニングセンター技術調教師

- 1996年 愛国の高専卒業
英ウエストオックスフォード大学馬学科に入学。
リチャード・ハノン厩舎、サー・マーク・プレス
コット厩舎、仏クリケット・ヘッド厩舎で研修
- 2000年 米ロバート・フランケル厩舎、
ロバート・スキャンロン厩舎に所属。
- 2006年 栗東・橋田厩舎に所属。
- 2012年 調教師免許取得。現在は藤原英昭厩舎で研
修中。

中内田：栗東の中内田です。よろしくお願ひします。
育成牧場の出身なので小さい頃から競馬には興
味を持っていました。海外に興味を持ったのは、
アイルランドに初めてホームステイした時に、
ヨーロッパの大学に馬学科という学科があり、
馬のことを詳しく勉強できるというのを知って
ヨーロッパへの留学を決めました。

進行：大学進学のため、高校からアイルランドに行っ
たのですか。

中内田：最初に行ったのがアイルランドなので、リ
ムリック大学に行きたかったのですが、イギリ
スに競走馬を専攻する大学があるのを知り、そ
ちらに進路変更しました。

進行：在学中に色々な厩舎で研修をし、フランスの
方でも研修をしています。これは学生生活を
送りながら、長期の休みを利用して行なわれた
のでしょうか。

中内田：リチャード・ハノン厩舎は大学の近くだっ
たので、毎朝調教を手伝わさせていただいた後で
大学に通う形でしたので、厩舎にはほぼ毎日通っ
ていました。サー・マーク・プレスコット厩舎
はニューマーケットにあったため、在学中に研
修期間というのが4ヶ月間あるのでそれを利用
して、フランスのクリケット・ヘッド厩舎には
夏休みを利用してそれぞれ4ヶ月間研修をし
てきました。

進行：馬のことを学ぶ大学なので、色々な厩舎での
研修が可能だったのですか。卒業後2000年にア
メリカへ行って、今度はロバート・フランケル
厩舎に就職されたのですか。

中内田：在学中に英・愛・仏と見てきたので今度は
アメリカも見たいという軽い気持ちでアメリカ
に渡りました。

進行：左の写真はその時のものですが、今、日本で
種牡馬として活躍中のエンパイアメーカー号に
騎乗されていますが、ずっと調教していたので
すか。



中内田：これはベルモントステークスを勝った直後
に厩舎全体がサラトガに移動した時に撮った写
真です。最初は他の助手が調教していたので
すが、その人が怪我して自分のところに回って
きました。

進行：右上の写真は大学時代の学友と一緒に写し
たものですが、皆さん競馬の仕事に就かれてい
るのですか。今でも交流はありますか。

中内田：はい、みんな競走馬関係の仕事をしていま
す。今もフェイスブックを通じて交流してい
ます。

進行：右下はフロリダのトレーニングセールの際の
写真ですが、これはロバートスキャンロンさん
のところにいる時のものですね。

中内田：アメリカでは最初の2年半フランケル厩舎
で働いて、その後2年間フロリダのピンフッカー
のところへ勉強しに行きました。これはオカラ
のトレーニングセールでの公開調教の時の1枚
です。1ハロン10秒台で走る、売りのための公開
調教です。

進行：エンパイアメーカー号についてご説明してお
きます。本馬はフロリダダービー、ウッドメモ

リアルステークとアメリカのG I 競走を勝ち、ケンタッキーダービーではファニーサイドの2着、そのあとブリークネスステークスは回避して、ベルモントステークスG I を優勝しています。2004年からは自身の生産牧場であるジウドモントファームで種牡馬入りして、2011年から日本でJBBAの種牡馬として供用されています。エンパイアメーカーとはどのような馬でしたか。

中内田：すごく個性の強い馬で、常に我を持っていて、調教時も少し嫌なことがあるとキャンター中でも止まってしまうような一癖ある難しい馬でした。

進行：落馬とかはなかったですか。

中内田：1度あります。フロリダダービー出走前の調教で落とされました。怪我はありませんでしたが、自分も周りの人もヒヤヒヤしたという経験がありました。

進行：かなり苦労されたようですが、大種牡馬になった馬にも携わるなど色々な経験をされていますね。その他に思い出に残るような馬はありましたか。

中内田：フランケル厩舎にいた時、G I を年間25勝した年だったので、沢山のG I 馬に乗せていただきました。先ほどの怪我した助手というのが追切り専門のワークライダーで、その持ち馬が自分のところに回ってきたので、追切りだけならメダリアドーロ、ゴーストザッパー、またジウドモントファームの馬が多数入厩してきたので、バンクスヒル、ヒートヘイズ、インターコンチネンタルなどの沢山の名馬に乗せてもらいました。

進行：メダリアドーロ号は現在種牡馬で、牝馬でブリークネスステークスを85年ぶりに制したレイチェルアレキサンドラの父親です。

冨成：メダリアドーロやゴーストザッパーはどういう馬でしたか。

中内田：メダリアドーロは高級車に乗っているような馬でした。ゴーストザッパーに乗ったのは2歳時だけでした。デビュー前、すごい暴れ方をするのですけれど、体が柔らかくて落ちそうにはならなかったです。変な動き方をして「何、この馬」という印象の馬でしたが、いざデビューしてみるとすごい勝ち方をして、周囲の見る目を一変させました。

進行：実際に乗って見ないと分からないということですね。他にいますか。

中内田：フロリダに移動した後馴致に関わった馬で、バーナルディーニというダーレーの生産馬ですが、育成段階から走るオーラを持っていました。それと牝馬でベルモントステークスを勝ったラグズトゥリッチーズが思い出の馬です。

進行：バーナルディーニ号はブリークネスステークス、トラヴァースステークス、ジョッキークラブゴールドカップに勝ち、ブリーダーズカップクラシック2着という馬で、今は種牡馬入りしています。次に本木さんをご紹介します。2003年にアイルランドに渡られ、バリードイルレーシングに就職されました。その間2011年にオーストラリアのメルボルンのマイク・マローニ厩舎に所属され、アイルランドとオーストラリアの両方の経験があるということです。現在は北海道の持田氏のD-Jランチの方でナチュラルホースマンシップを学んでいます。

本木 剛介 氏 元 バリードイルレーシング

1997年 ノーザンファームに就職

2003年 愛国バリードイルレーシングに所属
(~2013年7月)

2011年 豪メルボルンの競走馬厩舎に所属
(~2012年4月)

現在 D-Jランチで持田裕之氏のもとナチュラルホースマンシップを学ぶ

本木：本木です。よろしくお願ひします。高校を卒業してノーザンファームに就職したのですが、24歳の時にノーザンファームファームに残るかJRAの厩務員になるかものすごく悩み、よく分からなくなってしまう取敢えず海外に出てみようと思い、クールモアで働いている後輩に相談したら、エイダン・オブライエン厩舎でビザを取ってもらえるということだったのでアイルラ

ンドに行きました。

進行：ノーザンファームに就職する前の話から伺いたいのですが、そもそもどうして競馬に興味をもたれたのですか。

本木：実家が東京競馬場まで自転車で行ける距離にあったので、高校の時から東京開催の時は毎週末競馬場に行っていました。自分も馬に乗ってみたいになりましたが、知り合いに馬関係の人がいなかったの社台ファームに手紙を出したところ、就職試験を受けてくださいと返事がきたので、試験を受けたら何とか合格できたのでノーザンファームに入りました。

進行：今年の7月までオブライエン師のところに行らっしゃいましたが、その間2011年～12年はオーストラリアにも行ってらっしゃいますがこれはどういう経緯でしたか。

本木：2003年から2009年までイエーツという馬を担当して、次の年ジョシュアツリーという馬でジャパンカップにきました。海外でG Iレースに勝利することとJ Cに来日するという当初の目標を達成して、新たな目標が見つからなかったの、暖かい国で馬に乗ることを楽しもうという軽い思いで行って来ました。

進行：本木さんにとっての思い出の馬はイエーツということですが、イエーツ号は、コロネーションカップとアスコットゴールドカップを4連覇し、現在は種牡馬入りしています。唯一アスコットGCを4連覇したという偉大な馬です。この馬とはずっと関わっていたのですか。

本木：アイルランドに行って1ヶ月くらいで、2歳馬だったイエーツに乗り始めて、引退する8歳までずっと乗っていました。

進行：この写真は左の2枚はイエーツ号ですね。



本木：はい。左上がアスコットGCの3連覇目です。4連覇目の写真は天気が悪かったのと、自分が泣いている写真で恥ずかしかったので止めました。

進行：左下の写真は

本木：調教中の写真で、向こうに見えるのが坂路コースで、1本目のキャンターが終わり2本目に向かう途中でオブライエン師からの指示を確認しているところです。ジープのミラーに小さく写っているのがオブライエン師です。

進行：あの有名なジープで並走しながら指示をするというシーンですね。大分馬と車が近いですが。

本木：これでも離れている方で、鏡が車に当たるくらいまで近づいてきます。

進行：これが通常のやり方で、ここから指示が出されるのですね。

本木：追い切りの時は芝コース脇のアスファルトの道があり、そこからスタートから最後まで指示を出しながら見えています。馬は全部で200頭くらいいて、追い切りは多い時で20組くらいやりますが、全組スタートから最後まで全て見ます。

進行：右側の写真は川の中を歩いているのですか。

本木：調教コースに行く時、年に数回大雨で水没するのですが、その時は入っていくしかないのです。

進行：気にせずに入っていくのですね。

本木：ライダーは反対に喜んで進んで入っていきます。

進行：馴致になるからですか。

本木：そんなことは考えていないです。ただ楽しん

で、写真とか撮っています。

進行：それがアイルランドの方の気質なのですね。

冨成：ちなみにイエーツはどういう馬でしたか。

本木：危ない馬でした。馬房も1人で入らない方が
良いくらい人を襲ってきました。飼い付け中に
耳を千切られたりとか、蹴られたりとか、この
馬に関してはけが人が多数出ました。僕も両肩
に咬まれた傷が残っています。結構きつかった
です。

冨成：騎乗した時はどうでしたか。

本木：騎乗した時は結構従順ですが、馬が自分が凄
いということが分かっているので、自分のテリ
トリーに他の馬が入ってくると襲いに行きまし
た。レース中でも追い切り中でも、テリトリー
に入ってきたら咬みに行ったり、後ろから馬が
近づいてきたら蹴りに行ったりとかを、ハロン
13秒から12秒くらいで走っていてもやるので
すが、基本的には乗りやすかったです。

進行：有難うございました。続いて大館敦志さんで
す。現在育成牧場 UPHILL に勤務されています。
大館さんは1998年に高校を卒業されて、最初は
北海道の生産牧場で勤務され2003年にオースト
ラリアのゴールドコーストの競馬学校を卒業後
クランボルン競馬場のクインスコット厩舎に所
属されました。写真はオーストラリアのものが
用意できなかったもので、現在の UPHILL で働い
ているところのものです。大館さんがオースト
ラリアで働いている時に思い出に残った馬はい
ますか。

大館 敦志 氏 (株) UPHILL

1998年 高校卒業後に北海道の生産牧場に勤務。

2003年 豪国、ゴールドコーストの競馬学校を経て、
クインスコット厩舎（クランボルン競馬場）
に所属。

現 在 信楽の UPHILL に勤務。



大館：幸運にもブラックキャビアに携わらせていた
できました。

進行：25戦無敗の大活躍馬ですね。この馬との関わり
はどういうものでしたか。

大館：この馬を管理している調教師の馬をうちの厩
舎が育成牧場のような形で預かっていたので、
1歳の終わりから5歳の秋まで、競馬以外の時
によくきていました。

進行：性格的にはどういう馬でしたか。

大館：2歳の始めまではカリカリして若い馬でした
が、2歳秋のデビュー時には大分、大人しくなっ
て、デビュー後は最も大人しい、賢くてしっか
り走ってくれる馬でした。

進行：はい、有難うございました。ご自身の思い出の馬の馬をご紹介しながらプロフィールの紹介とさせていただきます。

本日のパネルディスカッションは4つのテーマを用意しています。このあと調教育成方法及び馬の取り扱い方法についての日本と海外の違い、各国の飼養管理方法の特色・今後海外へ出て行く方へ心構えについて、話題を進めてまいります。

パネルディスカッションテーマ

- ① 調教・育成方法における日本との違い
- ② 馬の取り扱い方法における日本との違い
- ③ 飼養管理方法の特徴
- ④ 海外に行くにあたっての心構えなど

《① 調教・育成方法における日本との違い》

進行：まず調教育成方法について日本との違いについて、まずは田中さんからですが、田中さんは世界各国をコーディネーターとして色々な国を見られていると思いますので、日本と違う点についてエピソードを交えてお話願えますか。

田中：まずお伝えしたいのは、国によって大きくやり方が違うということです。フランスにはフランスの、アメリカにはアメリカの、オーストラリアにはオーストラリアのやり方があり、見ていて毎回新鮮に思えるほど違います。

進行：この前行かれていたフランスの特徴はどういったものでしょうか。

田中：1番の特徴はダートでの調教が基本であることです。通常はダートで乗って、追い切りを芝で乗るのがフランスの基本の調教ですが、ダートコースは砂の粒子がものすごく細かくてしかも深いです。広大な調教場なので、厩舎から調教場まで常歩で20～30分かかるとはありますが、馬道の砂が深いので、日本馬の中ではかなり立派な筋肉を持っているキズナ号も、最初の何日かは

まともに歩けなかったくらいです。トモの筋肉の使い方が全然違うのだと思います。乗っている調教助手もこのダートは「なかなか厳しい、手強い」と洩らすほどでした。そういったところで毎日豊富な運動をしてから、ダートで普通のキャンターに乗るとというのがフランスの基本的なスタイルです。

進行：ダートを歩いているだけでかなりの運動になるということですね。

田中：常歩での運動量だけでも、世界的に見てかなり豊富な運動量だと思います。

進行：アメリカでは、追い切りはどんな感じでしたか。

田中：アメリカの追い切りはとにかく時計を重要視して、かなり速いタイムを指示します。速い厩舎では5ハロンで59秒くらいの競馬並みのタイムを指示し、トップクラスのライダーは指示通りに乗ってきます。アメリカの競馬は最初のペースが日本と全然違います。テンから良い位置を取りに行って、そのままある程度のスピードで流れて、バテた馬が負け、バテなかった馬が勝つという非常に単純な競馬です。周回も全部左回りなので、左回りのコーナーでスピードに乗せていくというレースのスタイルに合った調教をしています。

進行：あと、香港の調教の特徴はどうでしょうか。

田中：香港は芝の短距離のレベルが高いですが、調教法にもそれが現れています。香港の馬がドバイで行なった最終追い切りは、日本なら5～6・7ハロンくらいから行きますが、香港では、まるでゲート試験のように、もっと短い距離を、追い切りでゲートから2頭で併せてビッシリ追って行きます。芝のマイルとかもっと長いところを使う馬がそういう調教をやっていました。香港の競馬ではそういったものが重要なのだと思います。香港国内の調教で一番重視されているのは、バリアトライアルという、1000mの直線コースで7～8頭で本当に競馬のように、恐らく乗っているのは全てジョッキーだと思いますが、実戦的な調教を何度かしながら競馬に向かっていくということを行なっています。

進行：短距離が主流ということで、スタートダッシュの練習をやっているということでしょうか。あとワークですが、アメリカではレースの何日前

に行なっているのが普通でしょうか。

田中：去年アメリカの西海岸、ロサンゼルスのレストランに馬を連れて行った時に、当時の主流の調教を現地の調教師に聞いたのですが、レースの6日前ということでした。日曜日に走る馬なら、5ハロン59秒という時計を出すのは月曜日ということでした。

進行：フランスでは追い切りはどうか。

田中：今年の凱旋門賞では、レースは日曜日に行なわれたのですが、現地の馬は全て火曜日に追い切りを行なっていて、水曜日に追い切ったのは日本の2頭だけでした。

進行：ワーク後、次の日というのはどうでしたか。

田中：正確な記憶ではありませんが、日本では追い切りの翌日は運動だけというのが主流だと思いますが、外国では結構乗ります。

進行：完全休養で馬場に出ないということはしないのですね。次に中内田さんにお聞きします。今アメリカの話が出ましたが、フランケル厩舎にいらっしゃったということで、アメリカの調教の特徴についてお願いします。

中内田：アメリカの競馬場はご存知のとおりフラットで左回りの周回コースのみで、日本の調教との一番の違いはウォーミングアップが殆どないということです。ウォーミングアップするとしても常歩で馬場まで行き、馬場に入ってからキャンターのスタート地点まで200mから400mくらいを速歩で行くくらいで、そのままキャンターに入ります。

進行：競馬場で調教しているので、ウォーミングアップする場所がないという理由でやっていないという訳ではないのですね。

中内田：ライダーの腕で馬ができあがるという感覚もありますが、基本的にアメリカ人はキャンターで馬を作っていくという考えがあるのだと思います。

進行：ウォーミングアップの効用というのはなかなか難しいですが、日本のように長く常歩をやったり、速歩を入れるということはないで、厩舎から出たらいきなりキャンターで、ゆっくり目のキャンターが少しウォーミングアップになると言うことですね。

中内田：徐々にペースを上げていくという調教はあ

ります。

進行：アメリカでは日本と同様調教タイムを計るということですが、時計の指示というのは重要視されるのでしょうか。

中内田：普段の調教では取りませんが、大体1ハロン16~20秒の間で日によって変えます。追い切りでは細かく指示が出ます。5ハロンで62秒、速い場合は58秒と競馬並みのハードな追い切りが多かったです。

進行：トレーニングセールでもタイム重視なので、時計をきっちり計るのですね。

中内田：フランケル厩舎では前後1秒のズレは許されましたが、それ以上になると怒られます。

進行：時計重視の調教ということですね。クーリングダウンは如何でしたでしょうか。

中内田：アメリカでは分業制で、クーリングダウンはホットウォーカーという人達が最低20分、追い切り後は30~40分引き馬でクーリングダウンを行なっていました。

進行：大学時代にいたヨーロッパの方の調教の特徴は如何でしょうか。

中内田：アメリカと違い調教タイムは計測せず、感覚的なものが重要視されていたようです。

進行：馬の息づかいとか表情を見ながらということですね。

中内田：はい、それと施設が広大なのでそれを上手く利用しながら調教していました。それから見ると日本のトレーニングセンターというのは、これだけの小さな場所でこれだけの設備、密集した厩舎、バラエティーに富んだ調教コース、逍遙馬道など、世界に誇れる施設だと思います。

進行：日本のトレーニングセンターは人工的に作り出したものですが、集約された施設で色々な調教ができるのは世界にはないということですね。本木さんにも同じような話をお願いします。アイルランドでは調教タイムは計測しないということですが、どういうことでそうなったのでしょうか。ご経験から言えることはありますか。

本木：おそらく馬に合わせているのだと思います。普段の調教は基本的に坂路2本ですが、1本目の指示は必ずステディー（「一定の、安定した、心地良い」という意味）で、馬にあったペースで行なわれます。同じ指示ですが、シーズン中

のフィットしている馬は1ハロン16~17秒で上がっていき、カリカリした牝馬は22~23秒のハッキングに近いペースで上がったりと、馬に合わせた調教をしています。

進行：坂路2本が基本の調教で、1本目がゆっくりで…。

本木：馬に合わせてなので、馬によっては16秒を切る馬もいます。17~18秒の馬が多いです。あとはライダーの判断で馬に応じてやや遅くしたり速くしたりしています。

進行：2本目が少しそれよりも速いタイムでということでしょうか。

本木：2本目はフィットしている牡馬なら毎日13秒くらいで上がっていきます。

進行：追い切りではないけれども毎日13秒という速いタイムで調教しているのですね。

本木：追い切りは週2回芝の坂路コースに行って、最後のラップは恐らく13秒くらいです。普段の13秒では調教後そんなに汗をかいていませんが、追い切り後はすごく汗をかいています。精神的な作用を利用しているのだと思います。

進行：距離はどのくらいで追い切りますか。

本木：2歳の秋くらいまでは5ハロン、古馬は大体7~8ハロンです。

進行：エイダン・オブライエン厩舎の調教の特徴はどんなものでしょうか。

本木：厩舎には馬が200頭、スタッフが100人くらいいます。それをオブライエン師1人で管理しているのですが、記憶力がよくて馬の顔をほぼ全部覚えていると思います。朝調教時に屋内馬場で、馬が常歩で歩いているところを陰から見て、馬の顔を見てライダーを識別しているので、たまにライダーが普段と乗り変わったりすると間違えて声をかけたりすることがあります。調教中も馬の表情を見て、そのペースで本当に苦しいのか、余裕があるかをしっかり見て、また蹄の音が力強く蹴っているかで体調を判断すると言っていました。

進行：馬の表情とか蹄音とか感覚的なオブライエン師独自のものですね。ジープでの追走というのはどういった意図でやっているのでしょうか。

本木：広大なのでジープでないと見られないということと、わざと馬の近くを走ったり、勢いよく馬に近づいて行ったりして、馬に何ごとにも動じ

させない自信を付けさせると言っていました。普段はジープで並走するのですが、以前引っ掛かってしょうがない馬の時、馬の前にジープを走らせて時々ブレーキを踏んだので、馬は車にぶつかってきました。暫くすると馬はランプを見ているのか車を見ているのか、走るだけでなく、車に集中してきました。日本では難しいですが。

進行：ぶつかるのですか。

本木：走りながら前脚がバンパーに当たっていました。乗っていたライダーは本当に怖がっていました。オブライエン師は常に何が良いか考えていました。

進行：実際の様子を見てみたいですね。オブライエン師は我々の考えを遥かに超えた天才気質の調教師ですね。全ての馬の顔を覚えているなど、真似をするのは難しいですね。

進行：大館さんはオーストラリアには9年間いらして、育成・調教についてはオーストラリアがスタートですが、一般論で結構ですがオーストラリアにはどういった特徴がありましたか。

大館：オーストラリアは基本的には競馬場の周回コースを使います。馬場はダートというかサンド、砂です。タイムは速くなく、結構ゆっくり回っています。

進行：タイムは計測するのですか。

大館：追い切りの時は多くの厩舎で取っていますが、取らないところもあります。自分のところは取っていましたが、細かく指示されたことはありませんでした。

進行：ルーチンのキャンターはそんなに速くないということでしたが、ワークではタイムや距離はどのくらいでしたか。

大館：余り長く速く走らせることはなかったです。5ハロンで速くても67~68秒くらいでした。最後の3ハロンを重視していました。

進行：そのほか日本ではやっていないような特徴的なことは何かありましたか。

大館：調教の時タイムが分かりやすいようにメトロノームを使って乗っているライダーがいました。

進行：調教前のウォーミングアップやクーリングダウンはどんな感じでしたか。

大館：短い方だと思います。やらないところは殆ど

やらなかったです。長々とやっている厩舎を見たことはありませんでした。

進行：テーマごとに質問を受けたいと思いますが何かありますか。皆さんの体験談のご披露でも結構です。

栗東①：海外では牧場で育成して競馬に向かうということが可能のようですが、日本では育成牧場とトレーニングセンターで分担が決まっているので、両者で共通の認識をもてればもっとスムーズに行くことが多いと思うのですが、何か良い方法があれば教えてください。

中内田：そのアイデアは僕も知りたいです。結局はコミュニケーション不足の問題で、やはり技術の差があるので、どちらに合わせると言うのではなく、両者がそれぞれにもっと足を運ぶようにして、交流をもっとすればこれからは良くなるのではないかと思います。厩舎内でも調教でテン乗りの時はできるだけ情報が欲しいですし、競馬でも初騎乗の騎手にはできるだけ情報を伝えます。それと同じ感覚で牧場とも情報交換をする必要があると思います

大館：コミュニケーションですが、ブラックキャビアの調教師がうちの厩舎にきてもブラックキャビアを見ないで、うちの従業員たちとビールを飲んで話していました。従業員とそういう壁がない付き合い方ができていました。

栗東②：海外の経験から、日本で悪しき風習というか、最も良くないと感じるものを教えてください。

進行：言いにくい話だと思いますが、決して批判ということではなく、何かあればお願いします。

本木：向こうの人は、馬社会の人間に限らず、人間関係で細かいことに悩まないと思います。

進行：次のテーマで、人間の気質による馬の取り扱い方の違いの話が出ると思うのでそちらも参考にしてください。

栗東③：各国での新馬の発走調教の違い、悪癖馬の調教の違いをお教えてください。

本木：オブライエン厩舎では1歳で入厩したら、鞍をつけていない状態でゲートを何度か通して駐

立するくらいまでやります。2歳の3月後半くらいから競馬があるので、早目に使えそうな馬はその1ヶ月くらい前から、ちゃんとできるまで毎日やります。ゲート試験がないのでそんなにしっかりはやっていないため、競馬でなかなかゲートに入らない馬も多いです。ゲート内で暴れる馬の矯正ですが、モンティロバーツラグという絨毯みたいなものを背中に乗せられるので、ゲート内でぶつかっても馬が気にならないため、それほど凄く暴れる馬はいませんでした。

冨成：アイルランドでは発走試験があって、1回は受けるはずですが。

本木：1人だけ発走委員がきて、ゲートに入っているところを確認しますが、1頭1頭名前をチェックしているわけではないので、休んでいる馬が受かったということがありました。

冨成：アイルランドはそんなに厳密ではないのと、イギリスは発走試験がないので、イギリス・アイルランドはレースでもゲートに入るのは遅かったです。日本はスムーズな競馬をファンに提供する為に、しっかりとした発走が求められているというのが日本の競馬のシステムで、これは世界的に誇れるものだと帰ってきて改めて感じました。

大館：オーストラリアではゲート試験という本格的なものはないと思います。うるさい馬は競馬場の担当者がきて、普通よりうるさくても取り敢えずゲートを出られればOKが出て競馬に使えるようになります。

中内田：アメリカはゲート試験があります。出走予定レースの2～3週間前、馬が大体仕上がってきた時に受けて、それに合格しないと出馬投票できないシステムです。クセ馬の矯正にはナチュラルホースマンシップを取り入れています。あと、ゲートでうるさい馬は体格の大きなゲートボーイがつくので、まだ力のない2歳馬だと完全に押さえ込まれてしまいます。

栗東④：最初のプレゼンテーションでシステムが違っていると仰っていましたが、海外と比べて日本のシステムでご苦労していること、工夫していることはありますか。

中内田：JRAの方々に前に言うのも申し訳ないのですが、日本の競馬は規制がとても多いのでそれ

が1番困ることです。ただ規制緩和とよく言われますが公正競馬を守ることが第一ですし、馬券の売り上げを守るためにもやむをえないと思います。馬を作るうえでは、馬の管理者が変わることが苦勞する点というかこれから苦勞することになる点だと思います。生産、育成、トレーニングセンター近郊の牧場、それから厩舎、それらが全て点なので線になって欲しいと思います。

進行：先ほどのコミュニケーションの話にもありましたし、次のテーマでも出てくるかもしれませんが、共通認識は海外の方が持ちやすいのですね

中内田：海外では生産・馴致が終わったらあとは厩舎で全てやりますし、厩舎から放牧に出るのは怪我とか長期休養しかないので、担当者が変わることはありますが、馬を管理している人は変わらないです。

《② 馬の取り扱い方法における日本との違い》

進行：次のテーマに移ります。馬の取り扱い方法についての日本と海外の違いですが、また、田中さんからお願いします。どのような印象がございますか。

田中：日本の馬が世界の中で間違いなく一番手をかけられていると思います。色々な要因があると思いますが、1頭あたりのスタッフの数が多く、仕事の時間が他国に比べ圧倒的に長いので、世界の国に負けない、あるいは日本の方が優れた仕事ができていると思います。

進行：手入れの時間など他の国はもっと短いということでしょうか。

田中：ここにこられている殆どの方が、馬が好きだから、馬の仕事がしたいからという方だと思いますが、外国ではそうではなく、たまたま馬の仕事をしているという人も多数います。そういう面でも日本の競馬界は恵まれていると思います。皆さんの馬にかける情熱というのを日本の競馬界は大事にしなければならないと思います。

進行：その他に海外の馬に対する印象はどのようなものでしょうか。

田中：外国の馬全般ではないですが、馬が大人しいです。特にヨーロッパの馬に感じますが、人間が馬に触っていても危ない場面を殆ど見たこと

がありません。装蹄する際、日本では装蹄師のほかに厩務員が前を押さえ、装蹄師の弟子が後ろを押さえたりして3～4人掛りでやるのが珍しくありませんが、フランスの厩舎では、昼間の空き時間に装蹄師が1人で馬を張っただけで作業を終了させて、厩務員が出てくる時には既に鉄を打ち終えていたり、パドックで女性のスタッフがドレスアップに近い服装で高めのヒールで馬を引くことをよく目にしますが、もし少しでも馬が暴れたら危ないと日本からきた人は心配しますがそういうことは決して起こらないくらいの信頼感を持って馬に接しています。

進行：中内田さんはヨーロッパ、アメリカ両方を経験されていますが、馬が大人しいという話がありました。そういうことは感じましたか。

中内田：例外はありますが、ヨーロッパ・アメリカとも日本に比べて馬は大人しいです。田中さんに付け加えると、馬がもう少し堂々としていた気がしました。

進行：馬がですか、人ではなく。

中内田：馬も人もです。

進行：取り扱い方法が違うからなののでしょうか。日本とヨーロッパ・アメリカとの決定的な違いとは何でしょうか。

中内田：ヨーロッパの場合は、扱う者の巧拙はありますが、常に馬と会話していました。誉めて伸ばすタイプで、ただ馬が立っているだけというさりげないところで馬を誉めていました。でも悪いことをした時はしっかりと怒るというメリハリのある躰や取り扱い方をしていました。アメリカではグルームにメキシコ人を雇っている厩舎が多いので扱いはそこまで上手とは思いませんでした。慣れていないメキシコ人たちは馬が少しでも悪いことをしたら直ぐ怒ったり「シャク」ったりしていました。馬が立っている時は何も言わず、1歩動いたら怒ります。

進行：手入れとかメンテナンスの違いというのはありましたか。

中内田：日本の厩舎に入って1番驚いたのは真冬でも馬を丸洗いすることで、海外ではありえないことでした。ヨーロッパでも暑い時はホースで丸洗いはしていましたが、それ以外ではスポンジで手早く拭いてあげる、汗をかいているとこ

ろを乾かしてあげる程度で、冬場に馬を洗うというのは見ませんでした。アメリカでも同じでした。

進行：日本のようにボイラーがあってお湯が出るというわけではないのですね。

中内田：水しか出ないところが多かったので洗っても脚元だけでした。

進行：馬を冷やさないことに気を使っているということですね。

中内田：基本的に筋肉を冷やさないという考えだと思います。馬房の中で馬装している時や手入れしている時も前扉を閉めて、手入れしていない部分は毛布や馬着で覆ってあげていました。

進行：馬体に与える温度の影響というのを重要視するというのが馬の取り扱いの特徴ということですね。本木さんにもアイルランドの馬の取り扱いの特徴についてお伺いします。

本木：結構粗いです。中内田さんも仰っていましたが、オンとオフの切り替えが上手いと思います。悪いことをしたら凄い勢いで怒るけど次の瞬間は笑って話しかけるので、馬が凄く理解しやすいと思います。

進行：日本人が苦手な意思表示が上手いのですか。

本木：日本人は怒るとずっと溜め込むところがありますが、向こうの人は喧嘩しても翌日は何もなかったように接してきます。

進行：本木さん自身はオンとオフの切り替えはできましたか。

本木：始めのうちは難しかったのですが、10年もアイルランドにいたので最後の方はできるようになったと思います。

進行：人間がリーダーであるということが馬にキッチンと教えられているのですね。

本木：馬が日本より大人しくて、暴れる馬が殆どいないので扱いが楽でした。どうしてかは分かりませんが、アイルランドの牧場で働いている人は190cmくらいの大柄な人が多く、当歳の時、馬が暴れた時に馬を持ち上げて人間には敵わないことを教え込んでくれているので、それも影響しているのかも知れません。

進行：大きな男の人だけでなく女性ライダーも数多くいると思いますが。

本木：オブライエン厩舎では4割くらい、メルボル

ンでは5割からそれ以上が女性だったと思います。日本では女性が少ないので特別扱いされて、大人しい馬しか乗らないことが多いですが、向こうでは男性と同等に難しい馬やきつい馬にも乗っています。自分にはきつくて抑え切れない馬を、夏休みのバイトできた女子大生が普通に乗っていたので凄いなと思いました。

大館：オーストラリアも日本に比べ女性は多いです。男性と同じくらいいましたし、男性と同じように回ってきます。

進行：アメリカではどうでしたか。

中内田：アメリカでは良いライダーはヨーロッパからきていました。中には女性もいました。アメリカ人の良いライダーというのは余り印象がなく、むしろメキシコ人がカウボーイのように乗っていたのを覚えています。

進行：彼らは必ずしも馬の仕事がたくてしているとは限らないと先ほど話がありましたか。

本木：そうだと思います。馬が好きで働いている人もいますが、下作業する人は東欧から出稼ぎ感覚で来ている人が多く、アイルランド人のライダーも辞めて次に保険屋やコンビニで働いているというケースも珍しくなかったです。

進行：日本ほど馬産業が特別なものというわけではないのですね。

本木：一般家庭でも馬を飼っているので、馬に乗れるから取り敢えず競走馬に乗ってみるという人が多いです。

進行：大館さん、オーストラリアの取り扱い方法はどうでしたか。

大館：オーストラリア人は大らかで楽しく仕事している人が多いです。ピリピリしている馬が少ないのも、それが影響しているのかもしれませんが。

進行：細かいことは気にしないのですね。

大館：余り神経質な人はいませんでした。

進行：手入れとかでは丸洗いはしていましたか。

大館：オーストラリアも夏冬問わずほとんどの厩舎で丸洗いしています。

進行：基本的な馬の取り扱い方法の違いについて感じられたことはありますか。

大館：基本的にオーストラリアでは専門に別れていることが多いです。騎乗するだけの人と下で作業する人というふうに。ライダーは鞍をつける

ことはなくただ乗るだけで、馬場のわきに馬を待たせて、乗り終えたら直ぐ次の馬に乗り換えて、多い時は1時間で5～6頭乗る厩舎もありました。そういうところは人が少ないというのもあるでしょうが。

進行：人の気質が大らかで、馬の気質も大人しい馬が多いとのことですが、なぜなのか理由は分かりますか。

大館：関係あるか分かりませんが、オーストラリアでは去勢している馬が多いので、厩舎にいる馬も大人しい馬の確率が高く暴れる馬が少ないので、厩舎が穏やかな時が多いです。

進行：皆様からもこの件に限らず何かご質問はありますか。

美浦①：せん痛になる馬が何頭か出るのですが、外国ではせん痛はどうですか。もし少ないのであれば、リラックスさせる調教法とか、飼料とかで対応できるのでしょうか。

進行：せん痛は日本と比べて如何ですか。

中内田：明確な答えはないですし、今勉強中ですが、日本はストレスを与え過ぎの気がします。原因は人間の与えるストレス、競馬のストレス、調教のストレスなど色々なストレスが考えられますが、その緩和方法は馬それぞれで見つけてあげる必要があります。グラスピッキング、ローリング（砂浴び）など。飼料では日本は乾草の量が圧倒的に少ないです。アメリカもヨーロッパも乾草は自由摂取というところが多かったです。アメリカの方がヨーロッパより多かったです。ヨーロッパからアメリカに移籍してきた馬がよくせん痛になっていました。広々としたところで毎日調教されていた馬が、小さな馬場で毎日グルグル回っているだけの調教になると、精神的にストレスになったり、馬自身がうるさくなったりという傾向はありました。対策は一緒に考えましょう。

栗東⑤：育成牧場で勤務時代、ある担当者が2歳馬を意味なく叱っていたため、馬が人間不信になって首元を狙って咬みにくるような人間を襲う馬になってしまったのですが、こういう馬はどうやって立て直したら良いですか。

本木：まずその人の教育が必要です。意味なく叱る行為で信頼関係を失うのは誰が見ても明らかです。もしそういう馬ができた時は、まず人間との信頼関係を取り戻す必要があります。今僕が学んでいるナチュラルホースマンシップとかの特殊な技術を使ってトライしてみるのも1つの方法かと思います。

栗東⑤：有難うございます。あと少し戻りますが、先ほどのプレゼンテーションで走る気のない馬を走らせるのには待つと言っていました。具体的にはどの様に待つのでしょうか。

富成：アイルランドはJRAのように未勝利戦に勝てなかったら使うレースがなくなるということはないので、馬主次第ですが、ある程度までは待ってくれます。マイケル・ハルフォード師は「調教師に1番必要なのは忍耐だ」と言っていました。ケビン・ブレンダーガスト厩舎でも全く動かない馬について、しばらく放牧に出して立て直すしかないと言っていました。システムが違うので日本では解決策にはならないかも知れませんが。

栗東⑤：地方に行って帰ってくるという方法もありますが、日本では難しいですね。

中内田：走る気がなくなった原因・理由が必ずあるので、まずそれを探るところからの作業だと思います。それが分からないので皆苦労しているのですが、それを考えることがこれからの技術の向上に繋がるので諦めずにやっていきましょう。

栗東⑥：立ち上がるという癖への対応方法を教えてください。オセアニアの人と仕事した時、彼らは喜んでそのまま乗って、ステッキで頭を叩いて教育していました。そういう立ち上がるという行為に付き合うという接し方もありますが、危険な結果に繋がることも多いのでどういう対処法があるのでしょうか。また日本のトレーニングセンターでは最近乗馬の経験を重要視する関係者が増えてきましたが、海外では日本ほど重要視されているのか、またどのくらいの比率で経験者がいて、実際どのように役に立っているのか教えてください。

本木：オブライエン厩舎では古馬になって立ち上がる馬は殆どいませんでしたが、立ち上がる馬に

自分が乗った時、オブライエン師はカウボーイが使うような鞭で立ち上がった瞬間に叩いていました。立ち上がるのは人間や周りの何かが馬にサインを与えているので、それを見つけることが重要なのだと思います。それは馬によって違うでしょうが

進行：中内田さんは立ち上がる馬に乗っていたことはありますか。

中内田：はい、一度死にそうになったことがあります。線引きの問題で、走る馬なら立ち上がっても許す、未勝利馬なら許さないというのが多分あると思います。基本的にスキを与えているから立ち上がるので、立ち上がりそうな時に取り敢えず前を出して立ち上がれない姿勢に持っていくというふうに躡けるのが一番簡単で単純な対処方法だと思います。立ち上がって転ぶこともあるので怪我しないことが一番大切なので十分注意してやってください。

進行：乗馬経験についてはどうでしょうか。

本木：オブライエン師は、体のラインや首の形から、この馬は頭を下げて乗れるライダーを乗せたいと言っていたことがあります。その必要のない馬にはその技術のないライダーでも良いということで、馬によって乗馬の技術が活きることもあり、馬によってはそれがマイナスになることもあると思います。

中内田：向こうでは乗馬経験のある人が競走馬に入ってくるので、基本を分かった上で競走馬を扱っています。頭ではなく体で分かっているのどのポジションで乗ったら馬が動く、どういうことをすると馬がどう反応するかを分かっている人達が多かったと思います。

大館：小さい頃から馬に接している人が多いので、乗馬のレッスンを受けているかは分かりませんが馬慣れしていました。殆どのライダーが小さい頃から馬に乗っていました。

進行：日本のように馬というと競走馬が主体というのではなく、海外ではもっと馬と関わる環境がある、それが取り扱い方法に影響してくるということですね。

栗東⑦：馬を洗わないとの話ですが、その分ブラッシングを入念にするとか馬体を綺麗にするということを日本以上にやっているのかということ

と、ヨーロッパではクリッピング(毛刈り)をやっていますがその利点は何かを教えてください。

中内田：ブラッシングは時間をかけていました。マッサージ効果もあるのと、馬の毛艶を良くすることを心がけていました。クリッピングはどの国でもやっていました。調教後直ぐ次の馬に移るための時間短縮になっていました。気候が日本のように湿度が高なくて乾燥しているので脚を洗った後に拭かなくても直ぐ乾いて皮膚病になることはなかったです。風土の違いというのが大きいです。

本木：ブラッシングはそんなに時間をかけていませんでした。僕も行った当初は頑張っかけていましたが、周りの人は汗のマークが無くなったら終わりにしていました。午後の作業はブラッシングとその後に青草を食べさせる(グラスピッキング)のですが、青草を食べさせる方に時間をかけていました。クリッピングは冬毛の生える11月と馬によっては1月にやりますが、メリットは人間が気温のコントロールをしやすいことです。寒い日は馬服を3枚着せて、暑い日は1枚しか着せないという調整をしていました。日本では冬毛のままなので、暑い日も寒い日も同じなので大変だと思います。

栗東⑧：少し戻りますが、重しや人形を乗せる話がありました。その後いざ人が乗ったら入れ込む馬もいるかと思いますが、そういう馬はどうやって落ち着かせますか。

富成：基本的にはその後は普通に乗れる馬が多かったです。乗ってうるさい馬というのは経験しませんでした。向こうは乗り役が上手だということもあるのですが。日高育成牧場でも難しい馬はいますが、ひとつの方法として、もう1回ドライビングに戻って、じっくり時間をかけてやり直すことも手かと思えます。

本木：オブライエン厩舎では重しなどは使っていませんでした。

富成：重しを使用していたのはコンマネー氏だけです。人形は市販品なので他でもやっているところはあるでしょうが。

本木：自分行って最初に1歳馬に乗った時、1ヶ月に20回くらい落とされましたがアイルランド人は殆ど落ちないので、1年間違いを考えてい

ました。僕は馬が暴れることを怖がって、人間の方が緊張してネックストラップをしっかり持っていました。アイルランド人は暴れている馬の上でも携帯電話で話しているのが普通なくらい人間がリラックスしているので、暴れる馬自体が少ないです。

《③ 飼養管理方法の特徴》

進行：飼養管理は次のテーマでも出てきますが、他にありますか。では、飼養管理に移ります。田中さん、この前行かれたフランスの飼養管理で何か特徴的なことはありましたか。

田中：殆どの国では乾草にチモシーを使っていると思いますが、フランスではチモシーは手に入らないので、フランス南部のフローというところで取れるフローハイという草を基本的に使っています。与えている量がとても多く、日本の5倍以上だと思います。日本の関係者の方は草を与えすぎると競走に適した状態にならないと考えますが、海外では決してそうはならず、むしろ日本の馬よりシャープな馬体で競馬に使ってくる馬が多かったです。あの草の量を毎日与えてあの馬体で出てこられるのは、調教で良い負荷がかかっているのだと思います。

進行：馬房に1日中自由採食できるように投げているのですか。

田中：1日3回相当量を投げ草で与えていたと思います。

進行：中内田さん、ヨーロッパで行かれたところでは特徴的な飼養管理は何かありましたか。

中内田：私の行った厩舎は基本的にフィードマンという飼葉担当者がいて、調教師の指示を受けて全頭の飼葉を作っていました。

進行：フィードマンが全馬の状態を見て量や内容を決めていたのですか。内容は変わらないのですか。

中内田：基本的なベースがあった上で、調教師が指示していました。飼葉自体がシンプルなので作りやすかったと思います。

進行：アメリカではどのような特徴がありましたか。

中内田：アメリカもシンプルでしたが、やたらサプリメントが多かったです。アミノセットとかビタミン系とか色々なものをゴチャ混ぜにしてい

ました。

進行：日本でも最近色々なサプリが入ってきて使っている厩舎も多いのではと思います。本木さん、オブライエン厩舎では飼養管理はどんな感じでしたか。

本木：飼葉の量はオブライエン師が馬体を見て決めています。内容は単食が多く朝はペレットだけ、昼は燕麦だけで、夜だけペレットにサプリメントと塩とガーリックビネガーを混ぜていました。燕麦は厩舎の中で潰した新鮮なものを与えていました。割れたての方が風味とかが良くて美味しいのだと思います。単食だと摂取した栄養が把握しやすいのだと思います。色々な種類を混ぜると好き嫌いで残すことがあります。単食だと食べた量でどのくらいエネルギーが取れたかというのが分かると思います。

進行：総量としてはどのくらいだったか分かりますか。

本木：具体的な量については富成さんの方が良いと思います。

富成：私がいたのは冬場のシーズンオフだったので意外と少なく濃厚飼料で5～6kgくらいだったと思います。シーズンに入ると増えるのですか。

本木：断然増えます。

富成：他の厩舎ではシーズンに入ると7～8kg若しくはそれ以上の厩舎もありました。ペレットはアイルランドで流行っていて、現地の兎玉調教師曰く、「ペレットは消化がよく燕麦のように糞に混じることがなく、全部吸収される」ということでした。非常に良い飼料だと感じました。あと、せん痛ですが、アイルランドではせん痛らしいせん痛は1度も見たことがありませんでした。原因は私もよく分かりません。

進行：日高育成牧場とトレーニングセンターと比べてせん痛はどうですか。

富成：日高育成牧場では減多にせん痛は見たことがありません。

進行：調教した後で放牧できる良い環境があるということでしょうか、結論は出ませんが。

進行：大館さん、オーストラリアでは飼葉はどういう感じでしたか。日本との違いとか。

大館：ふっくらした感じの馬が多かった印象があります。量も具体的なキログラムは分かりませんが多めに与えていたように思います。

進行：種類は日本と同じですか。

大館：大きな違いはないと思います。もっとシンプルでした、配合飼料と燕麦だけとか、それに草を少し混ぜるとか。

進行：回数は朝夕だけですか。

大館：朝と昼から夕方にかけての2回で夜飼いはなかったです。

進行：皆さんの方から飼葉のことについて何かご質問はありますか。

栗東⑨：飼い食いの悪い馬に糖蜜を与えると、何か工夫していましたか。

本木：オブライエン師に聞いたところ、「食べない馬は何日か餌をあげなければ、あげた時に食べる」と言っていました。

冨成：オブライエン厩舎で与えているビネガーは馬が好むもので、そういう工夫をしても食べないのかもしれないということだと思います。

進行：これは永遠のテーマのようで皆さん同じ悩みを持っているようです。

栗東⑩：日本人の気質なのか餌の成分を分析して投与しているところも多いと思いますが、海外ではそういうのはありますか。

本木：血液検査を毎週やっていましたが、それで飼葉が変わることはありませんでした。サプリメントはオブライエン厩舎のオリジナルのものを与えていました。

進行：餌の成分については海外でも飼養標準はあるのでそれに基づいて厩舎では餌を作っていると思います。

中内田：アメリカは分析とか好きな国なので結構やっていましたが、結局はベースの飼葉があってそこにフィードマンのさじ加減で微調整していました。フィードマンと調教師が馬体を見て、調教内容や競馬への臨戦過程を相談しながら飼葉の量を調整していました。

《④ 海外に行くに当たっての心構えなど》

進行：最後にこれから海外に行く方へのアドバイス、

心構えについて伺って行きます。田中さんから順番でお願いします。行く前には期間は決めて行ったのですか。

田中：下調べは結構念入りにやりました。最初は英語学校に何ヶ月行き、専門学校ではこのくらいのタイミングでここまでできるようになって帰ってこようというのは、行く前から明確に決めていました。

進行：日本では事前の準備は特にしていなかったのですか。

田中：海外の競馬に興味を持っていて、インターネットで海外競馬のニュースを見たり、英語の実況を聞いていたので、普通の高校生よりは英語はできたと思います。

進行：日常会話くらいはできるレベルで行ったということですか。

田中：そこまでできないと最初の1ヶ月くらいは海外生活でストレス溜まる部分が凄いなと思うので、それはできるだけなくすよう準備して行った方が良いと思います。

進行：それでも語学の面で苦労したことはありますか。

田中：馬を扱うことに関しては全くの素人だったので、そこで使われている言葉は初めてのものばかりだったので苦労しました。

進行：どうやって習得しましたか。

田中：周りにいた現場経験のある人と一緒に過ごして、ひとつずつ覚え、家に帰ってちゃんと勉強しました。余り勉強はしてこなかったのですが、あの時だけはよく勉強していたと思います。

進行：中内田さんは高校生から海外へ行きましたが、英語は向こうに行ってから勉強したのですか。

中内田：初めて海外に行ったのは高校1年生の時でしたが、その時は殆ど英会話力はありませんでした。そこで語学学校に通って、徐々に慣れていくという感じでした。競馬に関しては厩舎に行ってから勉強しました。ヨーロッパとアメリカでは別の用語を使っていたので、現地に行ってみないと分からないと思います。

進行：実際に仕事をしながら覚えていったのですか。本木さんは行く前に語学の準備は何かしていましたか。

本木：全くしていませんでした。

進行：学校教育で英語には苦手意識はなかったです

か。

本木：高校時代、英語は単位を取れてないくらい酷いレベルでした。英語力は相手とコミュニケーションを取りたい、相手のことを知りたいという強い願望があれば自然と伸びてくると思います。

進行：大事なものは強い意志ということですね。中内田さんはヨーロッパとアメリカの両方行かれています。これから若い人が海外に競馬を勉強しに行く場合、良い悪いという話ではなく、ここで学んだ方が良いというのがありますか。

中内田：個人的意見ですが、競馬の原点、近代競馬発祥の地はイギリスです。ヨーロッパが馬文化の先進国であるので、僕はイギリスを勧めたいです。もちろんアイルランドやフランスでも良いと思います。競馬だけでなく馬文化に触れてきて欲しいと思います。身近に馬がいたり、道路に普通に馬がいたりという環境を含めて学んだり体験してきて欲しいと思います。その体験は日本に帰ってきて活かすことも多くあると思います。軽い気持ちで行ってください。

富成：最後に大館さんと本木さん、これから海外へ行かれる方へ一言心構えなど何かあればお願いします。

大館：興味があれば取り敢えず行ってみれば良いと思います。行くことによって、聞いた話とは違う文化などに直接触れ合え、それは良い経験となり視野が広がると思います。英語も行ったらかんまりです。自分も最初は殆ど喋れませんでした。それがそれなりに仕事もできるようになったので、言葉に不安を感じたことはありませんでした。

本木：海外で外国人と一緒に暮らすのは困ることも沢山あるので、日本の本当の良さが改めて分かると思います。メルボルンでは半年いましたが、日本人が多く、馬以外の仕事をしている人と接するのが楽しかったし貴重な体験となりました。

進行：今日来ている方の中には育成牧場で働く若い方もいると思いますので、今日の話が何かの参考になればと思います。今の話も含めて何かご質問はありますか。

美浦②：全部終わってから質問しようと思ったので

大分さかのぼりますが、まず田中さん、フランスでは翌日も馬場で乗ったり、追い切り日が火曜日だったりして、他の国も見られていますが、日本とどちらが良いとか、簡単な感想をお聞かせください。

田中：日本では厩舎も牧場も休みの日を設けているところが殆どだと思いますが、フランスでは競馬は毎日行なわれているので、追い切りも毎日行なわれていて、基本的には休む日がないというローテーションで1年がずっと動いています。なので基本的に馬は毎日動かすものという考えが当たり前になっています。日本で毎日動かそうとしたら今までと感覚が違ってくるので間違いが起こるかもしれないのでどちらが良いというのはいけません。

美浦②：個人の感想ではどうですか。

田中：トレーニングセンターで事故が1番起るのは火曜日というのを聞いたことがあります。元は野生動物なので全く動かさないのは良くないと思います。先ほどストレスの話もありましたが、毎日少しでも動かす時間を確保した方が理にかなっていると思います。

美浦②：追い切りの翌日に日本では馬に乗らないというのはどう感じますか。最近では日本も角馬場で乗ったり、坂路で乗ったりする厩舎も出てきました。

田中：日本馬に関しては背中を休めるという意味で引き馬だけの厩舎が、自分が触れてきた中では1番多く、それで日本の馬は強く育ってきているので、それはそれで良いと思います。

美浦②：有難うございました。次に中内田先生、アメリカではウォーミングアップ無しで直接馬場に行くということですが、私達には考えられないのですが、中内田さんはヨーロッパにも行き日本でも働かれていますので、ウォーミングアップはやっているのでしょうか、馬によってはウォーミングアップをやらないというケース等、ウォーミングアップについてご意見をお願いします。

中内田：アメリカの馬づくりは工場みたいに各部署部署でやっていて、一貫してやらしてもらえなかったのが、馬づくりをしたという感覚はありませんでした。自分は装鞍された馬を持ってきてもらい、キャンターで1周馬場を回ってきて終わりという機械的な馬づくりで、そこに関し

ては僕は賛同できませんでした。ただ良い馬に乗らせてもらっていたので、それを楽しんでいました。ウォーミングアップが短くてもよい馬というのはテンションが高い馬くらいしか直ぐには思いつきません。個人的にはウォーミングアップは怪我の防止や血液循環や精神的な面からも必要だと思います。

美浦②：有難うございます。本木さん、オブライエン厩舎では追い切りはレースの何日前にやっていたか。また翌日は馬に乗っていましたか。あと、オブライエン師が馬に乗る際にやらないように指示したことは何かありましたか。

本木：日曜日がレースの場合は、追い切りは水曜日と土曜日です。基本毎日乗るので、追い切りの翌日も牡の古馬なら13秒で坂路1本乗り、レース2日前の金曜日に2～3ハロンを全力で追うので追い切りよりも速い調教になっていました。前日の土曜日にも13秒で乗って競馬に望みます。オブライエン厩舎はオブライエン師の独裁なので、指示通りやらないと叱られます。オブライエン師は酒とタバコが嫌いで、調教時に朝酒が残っていないかチェックされるライダーもいました。

美浦③：追い切り後及びレース後の各国の馬のケアの仕方、その中でどれがベストか個人的な意見ををお願いします。

本木：特別なことは何もしていませんでした。2歳馬だけは脚を冷やしてバンテージを巻いていました。レース後の調教は、翌日は引き馬だけ、2～3日後は坂路1～2本、その翌日から通常の調教を行っていました。冷やすのはクラッシュアイスなので、日本の馬がやると逆にダメージが残るかもしれません。20分冷やすところを仕事に追われて30～40分冷やしてヤケド（凍傷）になっている馬もいました。

中内田：アメリカではレース後3日間は引き馬だけで、4日目から乗っていました。ケアについてはヨーロッパもそうですが、脚もとのケアだけはしっかりやっていました。あと、遊ぶ時間をしっかり取っていました。引き馬だけでなく草を食べさせたり、ラウンドペンでローリング（砂浴び）させたり、馬にリフレッシュさせる感じがありました。

田中：追い切り後日本では午後に獣医師がきて、視診・触診・治療等色々と処置してもらっていますが、外国ではリクエストした時以外はそういうことは殆ど見ませんでした。疲労回復剤も日本の方がバリエーションに富んでいました。レース後は、翌日又は翌々日からキャンターを乗り始めて、通常の調教に戻していきます。日本の遠征馬が3日間馬場に出なかったら、レース中故障を発症したと新聞に載ったことがありました。

美浦④：競馬直前の治療（補液・筋肉注射）について、日本では前日はできないので2日前にやっていますが、海外ではどうしていますか。

中内田：ヨーロッパでは競馬の前に補液しますが追い切り前が殆どです。アメリカでは競馬の前日に補液しています。針を刺すのではなく管を通して直接胃に入れていました。筋肉注射のように馬体に針を刺すことは見たことはありませんでした。

進行：はい、有難うございました。他にありますか。この後意見交換会もありますので、そちらでも色々パネリストの方にご質問できますのでご参加ください。最後に、競走馬育成協会が実施している海外派遣研修制度についてご紹介をさせていただきます。受付に資料がありますし、ホームページにも紹介がありますので詳細はそちらをご覧ください。では本日のパネリストの方を拍手を以って、講習会を終了させていただきます。

「競走馬の牧場で働こう BOKUJOB フェア 2013」

平成22年から3か年でおこなった「牧場就業者参入促進事業」（地方競馬全国協会からの補助事業）は平成25～29年（5か年）の延長が決定しましたことを、先ずはお知らせいたします。

さて、「牧場で働こうフェア in 東京競馬場」は、牧場版の合同企業説明会、および軽種馬産業を広く知っていただく機会として位置づけています。平成23年からこの「フェア」に先立ち、春休み期間中の3月に関東・関西の育成牧場において「日帰り見学会」を、夏休み期間中の8月に北海道において5泊6日の「夏休み牧場で働こう体験会」を、それぞれ開催してきました。

これらは牧場に就職をしようと考えている若者や保護者の方々（日帰り）に対して、実際に生産育成の現場をつぶさに見ていただくことが狙いです。参加者が「牧場で働くことの楽しさ、達成感、また厳しさ」などを、メールやSNSなどを用いて、友達などに口コミで広げてもらう効果も期待できます。

また、昨年からはじめた6月の「競走馬の牧場で働こうプレフェア」についてJRA 阪神競馬場以外に、本年はJRA 中京競馬場でも開催いたしました。

プレフェアは、BOKUJOB の認知度向上や関西地区における就労希望者の発掘を目的として始めたフェアの縮小版です。

◆◆「競走馬の牧場で働こうプレフェア」◆◆

6月15・16日（土・日曜日）10:00～15:00

JRA 阪神競馬場 アメニティホール

6月29・30日（土・日曜日）10:00～15:00

JRA 中京競馬場 ベガススタンド3階テラス

プレフェア会場	参加者(人)				見学者(人)
	内 訳			合計	
	高校生以下	大学(短大)専門学校生	社会人既卒者		
阪神競馬場	20	21	25	66	216
中京競馬場	14	13	25	52	960

主な内容（阪神・中京共通）

出展ブース：グリーンウッドトレーニング、ノーザンファーム、ヒルサイドステーブル、吉澤ステーブル、日本軽種馬協会（JBBA）、軽種馬育成調教センター（BTC）、日本装蹄協会および全国軽種馬青年部連絡協議会が出展し、個別相談、技術者研修や牧場就業について解説したパンフレット配布、パネル展示、映像の紹介を行いました。

当日の開催は、JRA 阪神・中京競馬場の協力、および三好氏・辻氏・下河辺氏3名からの多大なる協力のお陰もあり、混乱なく終了しました。

昨年は「宝塚記念」当日の阪神競馬場で実施したことから見学者だけで千名を超えましたが、本年は阪神地区で重賞競走が開催されない週ということもあり、見学者の数は多くありませんでした。

しかし、就労を前向きに考えている熱心な若者が多く来場し、出展協力牧場からは「昨年は概要説明で終わるなど慌ただしい説明会であったが、本年はじっくりとお互いに話げできた」、「面談の感触も良く、これが採用に繋がれば…」などのコメントもいただき、また、「日帰り見学会」や「夏休み牧場で働こう体験会」の参加者も来場するなど関心の高さを示していました。

次に、中部地区、中京競馬場でのプレフェアは、初めて競馬場に来場した親子連れや、阪神競馬場でのプレフェアに参加できなかった者など多彩な顔ぶれとなり、阪神同様に就労について熱心な若者に参加いただきました。

◆◆「競走馬の牧場で働こうフェア」◆◆

7月27・28日（土・日曜日）

JRA 東京競馬場 フジビュースタンド1階

出展牧場：宇治田原優駿ステーブル、追分ファーム、加藤ステーブル、グリーンウッド・トレーニング、信楽牧場・ヒルサイドステーブル、社台コーポレーション、社台ファーム、下河辺牧場、白井牧場、

これまでの牧場で働こうフェア（東京競馬場）の参加者数

	社会人(転職者)	大学生等	高校生以下	合計
第1回 (2010年)	450		150	600
第2回 (2011年)	132	140	178	450
第3回 (2012年)	119	91	199	409
第4回 (2013年)	91	73	243	407

千代田牧場、ダーレー・ジャパン・ファーム、ノーザンファーム、坂東牧場、ビクトリーホースランチ、松風馬事センター、吉澤ステーブルの17牧場16ブースが出展。

パネル展示：全国軽種馬青年部連絡協議会、競走馬のふるさと案内所による北海道での暮らし、牧場の一日などの紹介。

研修相談：日本軽種馬協会、軽種馬育成調教センター、日本装蹄協会が実施する各研修制度に関する相談ブース。

進路相談：静内農業高校の教諭による進路相談。

交流スペース：若手牧場従業員との交流による「牧場とは？」の基本相談。

昨年まで「牧場で働こうフェア in 東京競馬場」は7月の最終水曜日に開催していましたが、本年は7月の最終週末（土・日曜日）の2日間開催とし、名称も「競走馬の牧場で働こう BOKUJOB フェア2013」に改称して開催いたしました。

これは、パークウインズ時ではありますが競馬場への誘引（競馬への理解）と、「BOKUJOB」名称の認知度向上などが主な理由で、この他に参加者の保護者も参加し易いように配慮いたしました。

競馬場を知らない保護者、参加者に対して競馬や競馬場の施設を見学いただくことも理解度を上げることに繋がると考え「JRA 東京競馬場」での開催としました。初めての試みですが、「交流スペース」を設け、ブースでは質問しづらい初歩的な疑問に答えていただくため、牧場業務に現在従事している若手従業員（先輩訪問）からの牧場業務のイロハ（良いことも、悪いことも）や、不安に思っていることなどを聞く機会とした。多くの参加者や、牧場関係者に利用いただくなどし、次年度以降も設置したいコーナーの一つと事務局では考えています。

また、テレビ放映（競馬学校などの紹介）などで目にする「木馬（手動タイプ）」を展示し、騎乗フォー

ムの紹介や参加者が実際に木馬に乗り、見た目以上に難しい手綱さばきを体験していただくなどして、未来の騎乗員候補？を夢見ていただきました。

フェアについては、

- 1) 2日間開催としたことで参加者には、選択肢が広がった
- 2) 出展牧場からはプレフェア同様に「牧場への就労意欲の高い若者が多かった」との評価を得た
- 3) 交流スペースやパネル展示などで「ブース」以外で参加者との接触を持つ時間を有効に使える

などから来年度に向けて大きな判断材料が得られた開催であったと事務局では考えています。

次回以降の「場所」「日時」などは、牧場と参加者により良い環境の中での縁結びとなるように検討を続けていきたいと考えておりますので、牧場関係者の皆様のご協力をお願いいたします。

最後に出品協力いただきました牧場関係者の皆様、全国軽種馬青年部連絡協議会様、施設利用に配慮いただきました JRA 東京競馬場、阪神競馬場並びに中京競馬場に対し、本紙面をお借りして御礼申し上げます。



オープニング 出展牧場紹介



木馬 交流スペース横で参加者にも体験していただきました



交流スペース 説明を受ける参加者も真剣です



出展ブース会場

(牧場就業促進事務局からのお礼)

本年も、一年間を通じて、「日帰り見学会」「阪神・中京でのプレフェア」「東京での就業フェア」「北海道での体験会」など、計画どおり実施することができました。

これまでの3年間の「BOKUJOB」活動によって人手不足解消に貢献できたのか、軽種馬産業全体にどのような効果をもたらしたのかなどを検証する中で、

聞き取り調査の結果、50名以上は間違いなく当活動がキッカケとなって就労されています。これは、フェア等、ホームページを通じて各牧場に直接就職された実数であり、その他JBBA、BTCなどの研修所に入講した者、webサイトの閲覧後ハローワーク経由で就労されている方も多く存在し、確実に認知度は向上しています。

「強い馬づくりは、優秀な人づくりから！」を合言葉に、牧場の方々と事務局とで共同で取り組んでいる一連の活動を通じて、多くの若者が馬をつくり育てる仕事に関心を寄せ、職業選択肢のひとつとして検討してくれるよう、また、世界に通用する強い馬づくりという仕事の素晴らしさを広く社会に伝えられるよう、本協会としても更に努力したいと考えています。

日ごろよりBOKUJOBに参画していただいている生産育成牧場の皆様、関係者の皆様には改めて感謝申し上げます。

特に3月の「日帰り見学会」では、関東・関西の育成牧場の皆様に、また、8月の「夏休み牧場で働こう体験会」では北海道の牧場の皆様に、多大なるご協力をいただきました。本誌面を借りて御礼申し上げます。

また、北海道事務局の活動拠点となります「北海道事務所」を(株)ジェイエス内に11月に設置し、平成26年1月から本格的に活動を開始いたします。より身近にBOKUJOBを利用いただけると考えておりますので、求人掲載以外でもお気軽にお問い合わせください。

～ お知らせ ～

競走馬生産・育成牧場応援サイト「BOKUJOB」に求人牧場の告知広告を掲載してみませんか。まずは、Webサイト「BOKUJOB」を検索いただき、掲載されている内容をご覧ください。求人牧場の紹介記事の掲載費用は無料ですので、ご希望の方はWebサイトから直接、若しくは、記入フォーマットを印刷しFAXにて協会までご連絡ください。

東京事務局 電話 03-6809-1821 FAX 03-6809-1822

※連絡先は巻末の「いくせい」発行先と同じです

北海道事務局 電話 0146-42-5311 FAX 0146-43-3700

定時総会開催

平成25年度定時総会は、平成25年2月20日、日本中央競馬会本部ビル7階会議室において開催されました。

武田会長から開会挨拶があり、次いで日本中央競馬会益満宏行理事からの来賓祝辞をいただきました。

議長に高橋司氏が選任されて議事に入り、次の議案が審議・承認されました。

- 第1号議案 「平成24年度事業報告および平成24年度収支決算について」
- 第2号議案 「平成25年度事業報告および平成25年度収支決算について」
(期間：1月1日～1月3日)
- 第3号議案 「平成25年度会費等の額並びに徴収の方法について」
- 第4号議案 「役員の報酬等の額について」
- 第5号議案 「理事及び監事の選任について」

なお、1月4日付で新たに発足した「公益社団法人競走馬育成協会」の役員は前組織からの任期を引き継いでおり、今回は全員が改選対象となり、次の方々が選任されました。

会長理事	武田 暁朗 (非常勤)
副会長理事	和田 隆一 (常勤) ※常務理事兼任
副会長理事	荻野 豊 (非常勤)
理事	飯田 正剛 ()
理事	高橋 司 ()
理事	諏訪 豊蔵 ()
理事	沖崎誠一郎 ()
理事	中内田克二 ()
理事	柏木 務 ()
理事	信國 卓史 () (新任)
理事	織田 信美 () (新任)
監事	安達 正奉 ()
監事	杉野 繁治 () (新任)

また、従来「事業計画及び収支予算」については総会にて決議しておりましたが、新法人の定款では理事会での決議となりました。

平成 25 年度「育成等に関する懇談会」の開催

平成12年度から「育成等に関する懇談会」が開催され、「競走馬育成に関わる諸問題」について日本中央競馬会と当協会との間で意見交換を行ってきました。

本年度の懇談会は、8月9日午前10時から、日本中央競馬会益満担当理事、朝井馬事部長、小玉生産育成対策室長ほか担当者が、競走馬育成協会から武田会長以下6理事ほか担当者が出席して、日本中央競馬会六本木事務所9階第5会議室で開催されました。

当協会からの要望（別紙参照）については、次のとおり回答がありました。

- 表彰事業については、BOKUJOBと並ぶ貴協会の根幹をなす重要な事業であり、その重要性については十分に認識しており、報奨金の水準維持については、JRAとしても今後も可能な限り支援を続けていきたいと考えております。

しかし、助成金については、売り上げ状況を見極めながらすすめていく必要があることもご理解いただきたい。

2. 2歳重賞の競馬場での表彰対象レースについては、育成者の貢献度合いが高い、比較的早期の2歳S（函館・新潟・札幌・小倉）に加えて、3年前から京都（デイリー杯）、東京（京王杯）も表彰対象となっております。本年についてもこれら6競走での表彰を、各競馬場にその意義を説明しつつ協力依頼を積極的に行い、実施できるよう準備を進めております。

さらなる重賞競走への拡大については、競馬会全体として、最終レースの発走遅延を避けるために、メインレースの表彰式の短縮を図っているところであり、困難であると言わざるを得ません。メインレース以外の2歳オープン競走などについても希望があるならば、関係各所への調査、調整をすすめたいと考えます。

3. JRAとしても先日は4回目となる東京競馬場のフェアを支援させていただきました。この活動は生産・育成者である皆様が中心となり、貴協会が主体性をもって取り組んでいくものと認識しておりますが、JRAとしても今後とも協力・支援を惜しまずに続けてまいります。

4. 「競馬関連機材等有効活用事業」については、今後も機材の必要な更新を行っていくので、要望にお答えできるような物件を案内できるものと考えております。JRAの施設部門の担当者ともさらに連携し、施設更新に伴う情報については、積極的にキャッチして、協会の皆様の要望に答えていきたいと考えております。

(別紙)

平成25年度「育成等に関する懇談会」について（要望）

平成25年8月9日
公益社団法人 競走馬育成協会

1. 育成技術表彰事業における褒賞金の水準維持について

育成技術表彰事業は育成牧場の役割と育成技術水準の向上に資する事業として、会員の期待や関心のきわめて高い事業であります。表彰実績をみると、特にファンの関心も高い新馬競走において表彰対象の約7割が当協会会員の育成馬であり、表彰事業の果たしている役割は非常に大きいと考えられます。

一方、表彰馬に対する賞金額は平成24年度の実績では1競走当たり64,300円となっており、当協会の育成技術表彰規程に定める「育成技術表彰として授与する賞金の額は原則100,000円とする」とは大きく乖離してきています。

そこで当事業の目的を果たすためには賞金水準を維持することが重要であると考えますので、是非検討して頂きますようお願い申し上げます。

※賞金額は「予算額を上回った場合には予算額を該当馬（頭数）により除した金額にて交付（単価の切り下げ）する。」としている。

2. 育成技術者に関する表彰について

JRAの協力により競馬場における2歳ステークス競走の表彰が現在全6競走で実現しており、会員の大きな励みとなっている。今後とも引き続き、表彰機会の提供をお願いするとともに、対象競走のさらなる拡大についてもご検討をお願いしたい。

3. 育成調教技術者の確保・養成について

育成調教に係る人材の確保・養成は競馬サークル全体の懸案事項となっている。これに対して軽種馬関係5団体が連携して「競走馬の生産育成牧場への若手就業者参入促進事業」を実施しており、“牧場で働こうフェア”には、平成22年度600名余、平成23年度450名、平成24年度は409名、本年度は407名の参加があった。本事業開始後の牧場における雇用件数は増加しており、着実に成果を上げている。

育成調教技術者の確保・養成の支援は公益法人である当協会の事業として重要な位置を占めており、今後ともJRAのご支援をお願いしたい。

4. 育成牧場の基盤強化対策について

近年、トレセンと育成牧場の連携が緊密になり、育成牧場にはよりレベルの高い技術が求められるようになってきた。これに伴い、育成牧場における施設・機械の整備は経営上重要な課題となっている。これに対して関係団体のご支援の下、当協会では軽種馬生

産育成強化資金利子補給事業や畜産近代化リース事業等を行っているところである。また、JRA からの「競馬関連機材等有効活用事業」については、昨年以降物件の供出をいただき感謝する次第です。

機材の払い下げについては会員の要望も強いことから、今後とも特段のご配慮をお願いしたい。

《参考》

事業名 \ 年度	平成 24 年度	平成 23 年度	平成 22 年度
利子補給事業	前年からの継続分 4 件のみ ※内 1 件は年度末に完済終了	前年からの継続分 4 件のみ	前年からの継続分以外に新たに 3 件、4 億 6 千万円の利用
畜産リース事業等	前年からの継続 3 件のみ ※ 1 件は終了	前年からの継続 4 件のみ	前年からの継続 2 件以外に新たに、ショベルローダー、トラクター各 1 台のリースが「畜産リース事業」で実現
競馬関連機材等有効活用事業	募集 1 回でトラクター、ダンブの 2 件斡旋	なし	募集 4 回で馬場柵、フォークリフト等 12 件の斡旋

事業 1

育成技術講習会

平成10年度より実施している育成技術講習会については、平成19年度から、JRA、BTC、当協会の3団体共催として実施しています。本年度は下記のとおり開催されました。各講習会とも会員はじめ生産・育成関係者及びトレセン関係者等多数の参加を得て、好評を博しました。なお、昨年に引き続き北海道地区でも講習会を開催し、盛況を博しました。

○東北地区

8月1日(木) 13:30~15:30

青森県畜産農業共同組合連合会

演 題：「アイルランドにおける繁殖雌馬と若馬の管理」

講 師：JRA 日高育成牧場 富成 雅尚 研究役

参加者数：56名



○関東地区

10月30日(水) 17:00~19:30

JRA 美浦トレーニングセンター 公正会館分館

演 題:『海外で競馬を学ぶ — 海外経験者が「世界の馬づくり」を語る —』

第1部(プレゼンテーション)

講 師: JRA 日高育成牧場 富成 雅尚 専門役

第2部(パネルディスカッション)

パネリスト: 中内田 充正氏 (JRA 技術調教師)

田中 敬太氏 (株)ピットコントロール)

本木 剛介氏

(元バリードイル・レーシング)

富成 雅尚氏 (JRA 日高育成牧場)

進 行: 富田 篤志氏 (JRA 馬事部生産育成対策室)

参加者数: 76名



○関西地区

11月6日(水) 17:00~19:00

JRA 栗東トレーニングセンター 公正会館別館

演 題:『海外で競馬を学ぶ — 海外経験者が「世界の馬づくり」を語る —』

第1部(プレゼンテーション)

講 師: JRA 日高育成牧場 富成 雅尚 専門役

第2部(パネルディスカッション)

パネリスト: 中内田 充正氏 (JRA 技術調教師)

大館 敦志氏 (株)UPHILL)

本木 剛介氏

(元バリードイル・レーシング)

富成 雅尚氏 (JRA 日高育成牧場)

進 行: 富田 篤志氏 (JRA 馬事部生産育成対策室)

参加者数: 186名



○九州地区

9月11日(水) 13:30~15:45

(公社) 日本軽種馬協会 九州種馬場

演 題: 「アイルランドにおける繁殖雌馬と若馬の管理」

講 師: JRA 日高育成牧場 富成 雅尚 研究役

参加者数: 33名



○北海道地区

11月27日(水) 18:00~19:30

静内コミュニティーセンター内会議室

第1部

演 題: 「今さら聞けないサラブレッドの栄養学」

講 師: JRA 競走馬総合研究所 松井 朗 研究役

第2部

演 題: 「日高育成牧場における飼養管理法」

講 師: JRA 日高育成牧場 村瀬 晴崇 主査

参加人数: 139名



※いずれの講習会も、時間には意見交換会を、参加者数には演者及び主催者スタッフを含みません。

育成技術表彰事業について

1. 育成技術表彰事業について

- (1) 平成11年11月29日制定「育成技術表彰規程」により、平成12年度から現在の表彰事業が重賞競走を対象に開始されました。
- (2) 平成13年度には、育成段階の成果が反映され易いと考えられる新馬競走が表彰対象に加わり、重賞競走とともに表彰が行われてきました。更に、順次表彰対象の拡充・充実が行われてきました（表1）。

2. 平成24年度の表彰事業について

- (1) 平成24年度の表彰件数は、会員の育成技術向上の成果として過去最高の250件に達し、新馬競走も214件と初めて200の大台をこえました。（対象競走数も新馬競走で24レース増えています）
しかしその結果、残念ながら更なる賞金単価の引き下げを生じてしまいました。
- (2) 平成24年度の表彰対象者は、表3のとおりです。

3. 平成25年度の実施について

- (1) 表彰要件等については昨年から変更はありません（表2を参照）が、表彰対象競走数が過去最多の500を超えた昨年よりは若干減って495レース（番組上）となりました。
- (2) 平成20年度に実現した重賞2歳ステークス競走の施行場における育成者表彰対象は、昨年度と同様、札幌・函館・新潟・小倉・デイリー杯及び京王杯の各2歳ステークスの6競走で行われ、3競走で会員の育成馬が勝利しました。
- (3) なお、表彰馬は、協会ホームページ <http://www.ttda.or.jp> に随時更新・掲載しておりますので、本事業の概要とともに、詳細をご覧ください。



H25.8.25（日）
新潟2歳ステークス ハーブスター号



育成者ノーザンファームへの表彰状の授与



優勝馬関係者一同の記念撮影

表1. 育成技術表彰事業の推移

区 分	表彰対象及び拡充の経緯	(表彰件数)
平成12年度	2歳重賞・3歳重賞 障害重賞・3歳(4歳)以上重賞競走の3歳馬・ダート重賞交流競走(3・4歳限定)	39件
平成13年度	2歳新馬競走	147件
平成14年度		163件
平成15年度	特定の重賞競走、表彰要件の緩和(育成期間5ヶ月以上)	125件
平成16年度	3歳新馬競走	195件
平成17年度		185件
平成18年度	3歳オープン競走	201件
平成19年度		213件
平成20年度		218件
平成21年度		225件
平成22年度		230件
平成23年度		229件
平成24年度		250件

表2. 平成25年度の実施について

種 目	表彰要件(注1、2)	賞 金	備 考
新馬競走	2歳新馬競走	原則として10万円	ただし、賞金総額が予算額を上回った場合、単価切り下げを実施。
	3歳新馬競走		
2歳重賞競走 (2歳重賞指定交流競走を含む。)	満1歳になる年度の9月1日～12月31日までの間に騎乗馴致を開始し、翌年の5月31日までの期間に継続して150日以上育成し、優勝した馬を育成した正会員		
障害重賞競走	継続して60日以上障害調教を行った馬であって、トレセン等入きゅう後6週間以内に障害試験に合格し、優勝した馬を育成した正会員		
3歳以上の重賞競走	トレセン等入きゅう直前に、継続して14日以上育成調教を行った馬であって、トレセン入きゅう後30日以内に優勝した馬を育成した正会員	原則として10万円	ただし、賞金総額が予算額を上回った場合、単価切り下げを実施。
平地の3歳以上のオープン競走 (3歳限定競走を除く。)			

注1. 前年度の12月31日現在、当協会の正会員であること。

注2. ただし、障害重賞競走にあつては、障害調教開始日現在において、当協会の正会員であること。

表3. 平成24年度 育成技術表彰対象者一覧

表彰会員名	代表者名	支部名	表彰件数					
			新馬競走	重賞競走			オープン	計
				GI-Jpn I	GIJ-Jpn II	GIJJ-Jpn III		
ノーザンファーム	吉田 勝己	北海道	64	1		3		68
社台ファーム	吉田 照哉	北海道	25	1		1	1	28
(株)ノースヒルズ	古谷 道昌	北海道	10					10
(有)ビッグレッドファーム	岡田美佐子	北海道	10			1		11
(有)下河辺牧場	下河辺俊行	北海道	8					8
(有)ファンタスクラブ	古岡 宏仁	北海道	7					7
(株)吉澤ステーブル	吉澤 克己	北海道	6	1				7
(有)宇治田原優駿ステーブル	八木 秀之	関西	2			2	3	7
ノーザンファーム天栄	吉田 勝己	東北	5			1		6
(有)坂東牧場	坂東 正積	北海道	5					5
(有)ヤマダステーブル	山田 秀人	北海道	4			1		5
(株)森本ステーブル	森本 敏正	北海道	4					4
(株)小国ステーブル	小国 和紀	北海道	4					4
(有)武田ステーブル	武田 茂男	北海道	3					3
(有)千代田牧場	飯田 正剛	北海道	3					3
(有)内田ステーブル	内田 裕也	北海道	3					3
(有)グリーンマイルトレーニングセンター	矢野 琢也	北海道	3					3
(農)串良軽種馬生産育成組合	釘田 義広	九州	3					3
(株)クラウン	矢野 悦三	九州	3					3
(有)加藤ステーブル	加藤 信之	北海道	2					2
(有)チェスナットファーム	広瀬 亨	北海道	2					2
(有)日進牧場	谷川 利昭	北海道	2					2
(有)ケイアイファーム	中村 祐子	北海道	2					2
(有)高昭牧場	上山 泰憲	北海道	2					2
(有)グランデファーム	衣斐 浩	北海道	2					2
柏木牧場	柏木 務	九州	2					2
(株)白井牧場	白井 岳	北海道	2					2
(有)日高軽種馬共同育成公社	小竹 國昭	北海道	2					2
(有)フロンティアスタッド	清川 孝徳	北海道	2					2
アクティファーム	加藤 祐嗣	北海道	1					1
追分ファーム	吉田 晴哉	北海道	1					1
(有)エクセルマネジメント	山本 敏晴	北海道	1					1
(有)カタオカステーブル	片岡 禹雄	北海道	1					1
(有)賀張共同育成センター	榎本 一雄	北海道	1					1
(有)グラストレーシングセンター	岡崎 修	北海道	1					1
(有)グランド牧場	伊藤 佳幸	北海道	1					1
(株)セイクリットファーム	小林 克己	北海道	1					1
(株)西山牧場	西山 茂行	北海道	1					1
(有)キタジョファーム	北所 直人	北海道	1					1
(有)ベーシカル・コーチング・スクール	高橋 司	北海道	1					1
(有)三石軽種馬共同育成センター	前川 則久	北海道	1					1
(有)ビクトリーホースランチ	荻野 豊	北海道	1					1
(有)コスモビューファーム	岡田 義広	北海道	1					1
(有)大作ステーブル	村田 大作	北海道	1					1
(有)谷川牧場	谷川 貴英	北海道	1					1
(有)中山牧場	中山 一寿	北海道	1					1
MS遠野	竹之下満義	東北	1					1
(有)日高大洋牧場	小野田健治	北海道	1					1
シンボリ牧場(有)	和田 孝弘	関東	1					1
(有)サラブレッドトレーニングアイランド	中村 浩章	関東	1					1
(有)下河辺トレーニングセンター	下河辺行信	関東	1					1
(株)グロースフィールド	原 昌久	関東	1					1
(株)レッキスホースパーク	吉田 俊介	関西		2	3	3	5	13
(株)グリーンウッドパーク	永山 正喜	関西			1		1	2
(有)イクタ	生田 敏成	関西				1		1
(有)高木競走馬育成牧場	高木 秀男	関東				1		1
(有)ミホ分場	藤沢 美咲	関東			1			1
(有)三重ホーストレーニングセンター	伊藤 和夫	関西					1	1
計	58 会員		215	5	5	14	11	250

海外派遣研修事業

(軽種馬経営高度化指導研修事業 生産育成技術者海外派遣事業)

当協会では、平成22年度から地方競馬全国協会が実施している「競走馬生産振興事業」のうち、経営基盤強化対策事業の軽種馬経営高度化研修事業（人材養成支援）により補助を受け、生産・育成技術者の海外派遣研修を実施しています。

この事業は、海外研修に係る諸経費（交通費、研修費、宿泊費等）の1/2を上限に補助金を交付するもので、平成10年から16年までJRAの補助により実施していた期間を通算すると、昨年まで実に104名がこの制度を利用したことになります。

本年度は、(公財)軽種馬育成調教センターから推薦のあった同センター第30期卒業生3名を5月10日から8月7日までの約3ヶ月間、アイルランド競馬学校RACE (Racing Academy & Centre of Education) に派遣しています。また、10月には軽種馬青年部連絡協議会の会員9名を欧州に、11月には会員関係者11名をアメリカでの短期研修に派遣しています。



アイルランドでの調教風景



調教場

今年度の海外派遣研修者及び就労牧場は次のとおりです。

RACE 派遣者

(公財) 軽種馬育成調教センター卒業生

田邊 義明 氏 (株)山崎ステーブル
 福井 佑輔 氏 (株)ノースヒルズ
 福島 直規 氏 (有)新和牧場

欧州派遣者

稲原 稔久 氏 (有)二風谷ファーム
 鎌田 正信 氏 (有)杵臼牧場
 近藤 光将 氏 (有)ヒダカファーム
 菅井 努 氏 (有)菅井牧場
 塚口 涉 氏 シンボリ牧場(有)
 藤沢 亮輔 氏 (有)藤沢牧場
 前谷 卓也 氏 前谷武志牧場
 三好 悠太 氏 (有)三好牧場
 門別 貴紘 氏 (株)門別牧場

米国派遣者

江下 英昭 氏 (有)下総トレーニング
 大川 幾男 氏 (有)大川牧場
 笠松 昌平 氏 (有)松栄牧場
 鎌田 正信 氏 (有)杵臼牧場
 川島 光司 氏 (株)RUMIファーム
 徳永 了三 氏 (有)松風馬事センター
 中脇 光 氏 MAXトレーニングファーム
 中島 彰宏 氏 (有)千代田牧場
 鳴島 敏晃 氏 (有)二ノ宮マネジメント
 水上 千歳 氏 (有)笠松牧場
 船嶋 真吾 氏 (有)松風馬事センター



欧州研修（ニューマーケット：雄大な自然のなかでの調教）



米国研修（解放感のある馬房）

〈参考〉海外派遣研修の実施要領（概要）

補助対象者

1. 協会の会員とその家族、及び会員が経営する牧場の従業員が経営する牧場の従業員であって、次の要件に該当するもの
 - ① 軽種馬生産育成に関する高度な知識・技術の修得を志向し、将来的にわが国の軽種馬育成に取り組む意欲が旺盛とみこまれる者
 - ② 所属する協会支部長の推薦がある者
 - ③ 協会と（公社）日本軽種馬協会双方の会員である場合には、原則として育成を主たる業とする会員または関係者
 - ④ 会員が経営する牧場の従業員にあつては、牧場経営者の推薦があり、同牧場で1年以上就労している者又は協会会長がこれと同等と認めた者
2. 会長が指定する生産育成技術者養成機関を卒業後3ヶ月以内の者（卒業予定者も申請できるものとする。）であつて、生産育成牧場への就労を

予定し、又は就労しており、当該養成機関の推薦及び就労予定牧場、又は就労牧場からの申請がある者

3. 会長が特に認める者

研修期間

3ヶ月以上1年以内とする。但し、研修の目的、研修内容により、期間の短縮を認めることがある。

海外研修場所

- ① 競馬先進国の軽種馬関連人材養成機関
- ② 競馬先進国の軽種馬牧場及び競馬場厩舎
- ③ 競馬先進国のせり市場及び競馬場。並びに競走馬生産育成関連施設

現行では以上のような基準に合致すれば補助金の交付を受けられますので、海外研修を計画されている牧場におかれましては、是非、ご相談ください。

事業4

修学奨励金交付事業

（軽種馬経営高度化指導研修事業 修学奨励金交付事業）

当協会では、平成22年度から地方競馬全国協会が実施している「競走馬生産振興事業」のうち、経営基盤強化対策事業の軽種馬経営高度化研修事業（人材養成支援）により補助を受け、生産・育成技術者の修学奨励金交付事業を実施しています。

これは、国内軽種馬関係機関が国内の軽種馬生産・育成の仕事に就くための者を養成するために設置した研修施設で教育を受ける者の内、勉学意欲があり

ながら経済的理由により修学が困難な者に対して修学奨励金を交付する事業で、現在は、（公社）日本軽種馬協会、（公財）軽種馬育成調教センター、及び協会が特に指定する研修所で研修を受講する者に対して、審査対象としている。

平成25年1月から3月に申請され、承認された件数は4件でした。

生産育成牧場就業者参入促進事業

(軽種馬経営高度化指導研修事業 就業者参入促進事業)

当協会では、平成22年度から地方競馬全国協会が実施している「競走馬生産振興事業」のうち、経営基盤強化対策事業の軽種馬経営高度化指導研修事業（人材養成支援）により補助を受け、就業者参入促進事業を実施しております。

平成25年度の主な活動としては以下のとおりです。

※詳細は「特集2」をご覧ください。

・「牧場で働こう見学会」

開催：3月20日

「シンボリ牧場」、「ビックレッドファーム銚田」

3月23日

「宇治田原優駿ステーブル」、「信楽牧場」他

・「競走馬の牧場で働こうBOKUJOB プレフェア2013」

開催：6月15・16日 「JRA 阪神競馬場」

6月29・30日 「JRA 中京競馬場」(新規)

・「競走馬の牧場で働こうBOKUJOB フェア2013」

開催：7月27・28日 「JRA 東京競馬場」

・「夏休み牧場で働こう体験会」

開催：8月25日～30日

「杵臼牧場、辻芳明、様似堀牧場、まるとみ富岡牧場、ビクトリーホースランチ、宮内牧場」他

・生産・育成牧場就職応援サイト「BOKUJOB」の運営

※求人牧場掲載は無料ですので、会員の皆様のご利用をお待ちしております

・「BOKUJOB ブログ」の開始

※ブログに投稿いただける牧場を募集しております。

「BOKUJOB」サイトの求人牧場紹介に拘らずに牧場の日々などを披露いただき、牧場就労に興味を持っていただくことを紹介しています。インターネットにて「BOKUJOB」、若しくは、「BOKUJOB ブログ」で検索いただくか、こちらのアドレスを入力ください「<http://blog.bokujob.com/>」。

お知らせ

地方競馬の馬主になりたい

地方競馬全国協会からのご案内

「地方競馬の馬主になりたい!」という方は、地方競馬全国協会までご連絡ください。

地方競馬の馬主登録制度についてご案内いたします。

インターネット「地方競馬 馬主」で検索。

地方競馬 馬主

検索

または、地方競馬の馬主情報については、地方競馬サイト <http://www.keiba.go.jp/owner.html> でもご覧いただけます。

〔問合せ先〕

担当：地方競馬全国協会

審査部 登録課 電話 03-3583-2142

(平日 9時30分～17時30分)

空席であった業務部長のポストに平成25年3月1日付でJRAから上原利紀が着任しました。

また、平成23年3月以来JRAからの事務援助者として勤務している総務部の藤崎明美は平成25年8月22日付で定年退職となり、引き続き当協会囑託として業務を行うことになりました。

新役員の紹介

定時総会にて役員の選任（詳しくはP31参照）が行われました中で新任役員について紹介いたします。

理事



のぶくに たかふみ
信國 卓史

現在
一般社団法人 家畜改良事業団
理事長

理事



おりた のぶよし
織田 信美

現在
一般社団法人 日本科学飼料協会
総務部長

監事



すぎの はんじ
杉野 繁治

現在
公益社団法人 日本馬事協会
専務理事

いっせい

2013 51号

発行日 平成25年12月28日
発行 公益社団法人 競走馬育成協会
〒105-0004 東京都港区新橋4-5-4
日本中央競馬会新橋分館4階
TEL. 03(6809)1821 FAX. 03(6809)1822
E-mail : kgj00522@nifty.ne.jp
URL : http://www.ttda.or.jp

編集責任者 和田隆一
制作・印刷 西谷印刷株式会社

